

—第二十回全国高校生童話大賞—

受賞作品集

目次

ご挨拶	全国高校生童話大賞実行委員会 委員長 岡田秀二	1
☆金賞		
縞猫	賀来心音 (浦和明の星女子高等学校一年)	4
☆銀賞		
鯨のオーエン	七海千夏 (尚志高等学校二年)	18
土産	青野有佳 (金沢大学附属高等学校一年)	34
窓ぎわの友達	柿沼希実 (同志社女子高等学校三年)	46
☆受賞作品一覧		62
☆第一回～第十九回受賞作品 作品一覧		65
☆選考委員プロフィール		77

ご挨拶

第二十回全国高校生童話大賞実行委員会 委員長 岡田 秀二

昨年は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い全国の多くの高校が休校やオンライン授業、夏休み短縮などの措置が取られ、大きく教育環境が変わりました。こうした状況下では高校生が童話創作に取り組むことが困難であると判断し、第二十回全国高校生童話大賞は一年延期という苦渋の決定を行いました。既に応募の準備をすすめるなど心待ちにしていた皆さんには心からお詫び申し上げます。

今年は新型コロナウイルス感染症対策も進み、多くの高校が対面授業を再開するなど大分明るい兆しも見えてきました。こうした状況から改めて第二十回全国高校生童話大賞を開催することになりました。未だ収まらぬコロナ禍にありながら予想を超える一八二校から九五八編という多くの作品が寄せられました。応募してくれた高校生の皆さんには心から敬意を表したいと思います。寄せられた作品はどれも高校生らしい想像力に満ちた好感が持てるものばかりで、特に入賞候補となった作品は作風が違えどそれぞれ独自の魅力をもっており、選考委員の先生方を大いに悩ませたと伺っております。

今回受賞された「金賞」の賀来心音さん、「銀賞」の七海千夏さん、青野有佳さん、柿沼希実さんをはじめ入賞された皆さん、本当におめでとうございます。第十七回から新設された学校賞では、京都府の同志社女子高等学校が二度目の受賞となりました。

さて、今回第二十回の節目を迎える全国高校生童話大賞は、二〇〇一年に国民的童話作家の宮沢賢治の故郷・岩手県花巻市と富士大学が共催し、「最も多感で、夢と創造力に富む時期にある高校生に、その瑞々しい感性と創造性を引き出す機会を提供する」ことを趣旨として、全国の高校生を対象に創作童話を募集しました。初めての試みにもかかわらず、いざ蓋を開けてみますと応募作品数は一、二六八編、応募校は三八四校、北は北海道から南は沖縄までほぼ全都道府県を網羅するという大変な反響でした。その後、回を重ね二十回までの応募総数は二一、四四九編と、毎回一、〇〇〇編余りの作品が寄せられています。高校生を対象とした童話コンクールとしては歴史もさることながら応募作品も高いレベルにあり、歴代入賞者の中には作家として活動している方もおり、応募者のさらなる活躍が期待されているところです。

第二十回記念事業として、これまで多年にわたりご尽力いただいた皆様に特別表彰を行いました。選考委員の童話作家の小野寺悦子様、柏葉幸子様、宮沢賢治記念館学芸員の牛崎敏哉様、そして表彰を盛り上げてくれた花巻農業高等学校鹿踊部ししおどり、花巻北高等学校放送部の皆さんに感謝状と記念品を贈呈しました。また、富士大学の特論「宮沢賢治から考える」を新規開講し、そのうちの五講義をオンラインで全国の高校生に配信しました（詳細は76ページ）。

終わりに、全国高校生童話大賞がこれまで二十回の歴史を重ねておりますのは、何よりも作品を応募くださった高校生の方をはじめ、指導された高等学校の先生方、慎重に審査をいただいた選考委員の先生方、報道機関の皆様、ご支援・ご協力をいただいた皆様のお力添えの賜物と深く感謝と御礼を申し上げます、ご挨拶に代えさせていただきます。

金

賞

しまね
縞猫

『縞猫』
しまねこ

埼玉県 浦和明の星女子高等学校一年 賀 来 心 音

少しずつ森になったその台地には、河が真ん中を突っ切つてのんのんと流れ、海原へ注いでおりました。そしてその河の下流のほう、汽水になるかならないかの所の岸边には、一匹の猫が棲んでおりました。

それはもう、まさるものとなない立派な猫だったのです。縞の毛並みは螺鈿づくりのようにきらきら光り、駆け出せばまるつきり稲妻じみて、素早い野うさぎもたけだけしい狼も、けして追いつくことはかないません。加えて理智も大へん働きましたから、こういった様をわざわざ鼻にかけて、ひんしゆくを買うようなこともなかったのです。

切り株の広場を通るときはにこにこ顔で挨拶し、けんかを聞きつければたちまち止めに走りだし、ねずみのお婆さんの手伝いなんかも、なかなかどうして熱心に務め、そんな風でしたから、森に住む動物たちはみな——へそまがりのいたち等は認めようとはしませんでしたが——猫のことが大好きなのです。そうして何より、口にはせねど、猫も自分自身を随分誇りに思っていたものです。

さてしかし、猫には一つだけ、どう頑張ってもできないことがありました。またそれは、同時に猫の第一等の恥でした。なにかといえは、泳ぎです。元来猫というものは、魚好きでありながら、水は大の苦手としているでしょう。その例にもれず、この縞猫も、泳ぎに限ってはでんで手も足も出ませんでした。たとえば朝早くに起き出して、家の裏手の河でひっそり練習などもしてみるのが、これがまた、まるつきり効果をなさぬような

です。師匠でもあればいいのに、彼は森の同胞たちにながづちをすっかり隠し通していましたから、他人に頼ることもありません。何日何月と経っても、猫はせいせい、ちよつと顔を洗ってみる位のことしか、できはしませんでした。

猫はこれが悔しくて、悔しくて堪らなかつたのです。

——僕はこの森で一等できる獣なはずだ。それなのに、泳ぎだけどうしてもかなわないのは、一体どういうことだろう。狭い川の流れを渡る位ならば、年端も行かぬ子ねずみにだつて簡単だというじゃないか。

こつ思つて前足を清いせせらぎに浸してみるのは、幾度となしにあつたのです。けれど彼にしてみれば、波は氷のようにぎよつとするほど冷たく、しかも上流からつぎつぎ押し寄せて来るものだから、だんだん温まってくれることもありません。終いにはこのまま骨身が凍つくとも感じられ、猫は毎回堪え切れずにとつとつぱつと逃げ出してしまつたのでした。

ある晴れた日のことです。猫は長い尻尾をぴんと立て、なす事もなく、ぶらぶらと河に沿つて歩いておりました。

森は上流へ行くにつれ深まってゆくのです。しっとりとした土の匂いだの、りすや小鳥やのさえずりだが、猫の感覚をくすぶつては去り、そうして、岩のような木の幹に根、黄白くちいさなきのこの類い、またうっそうとしながらも陽に透ける蔓草が、代わるがわるに視界を通りぬけるのです。猫は実に良い気持ちになつて、隣を滑る水の動きなども、ちつとも気にはなりませんでした。

そんな頃、ふいに樹を挟んだ猫の横を、風の塊のように走り過ぎたものがありました。

——長い胸に金茶の毛、私たちの奴に違いない。しかしこんな所で、一体何をしてるのか。

といつても、私たちの事となれば猫にはただ一つの理由しか思い当たりませんでした。

——さあ、何の悪だくみをしているのだ。

猫は縞の尻尾をぱつぱつと大きく揺らし、体を低くかがめて、虎視眈々と私たちを見つめました。私たちは一本の檜の根元に着くなりまわりを一巡りしました。そうしてにわかにはすばしこく幹を登ると、一かこの鳥の巣をくわえて、また下つてきたのです。

私たちは盗みをしたのでした。巣の中の卵は遠目からでも、瑠璃のように青く清らかな美しい光沢を帯び、生き物の体から現れたとはとても思えぬほどでした。実際、それは卵なぞではなく、河に磨かれた鉱石や、もしくは丸く割りとった海の一欠片だったのかもしれない。

しかしそうであればこそ、またそもそも、盗みはいけない事に相違ないのです。猫はぐくりと息を呑んで覚悟を決めると一気に駆け出して、私たちの首根っこへ食らいつきました。突然のことに私たちはあままりびっくりにして「ぎゃあつ」と叫ぶなり巣を投げ捨ててしまったのです。それでも猫は、なかなかその悪党を解放しはしませんでした。さすがに牙はひっこめても、本来やわらかな前脚でぎゅぎゅう圧さえつけ「馬鹿野郎、馬鹿野郎」と暴れる彼をじっとにらんでいたのです。

猫には、どこにだって本当の悪人はいるまいという信仰がありました。それでどうにか、「もう二度としないからゆるしてくれ」と、そんな改心の言葉を引き出そうと試みておりました。猫はもう幾度も、そうやってわるものをこらしめて来たのです。

しかし今度ばかりは、どうもうまく行かぬようでした。いたちがやがてぐったりしてきて、なお「おまえは

馬鹿だ」と悪罵するのを見てみると、猫はなにか虚しく憐れになって仕方ありませんでした。私たちの命は、今や猫の心持ち一つで決められるのです。だのに私たちはこつも反発して止まないのです。

猫はそのぐにぐにした体を抑えつながら、しばらくいたたちの顔をのぞきこんでいました。けれどいずれ、弱い者をむやみにいじめていると思われて、足を離してしまいました。となれば私たちはもう何もいわずに、またびゅんと風の塊のように走り出すのです。そうしてそそくさと河を渡って行くいたたちの後頭を、猫はただぼんやりと眺めておりました。

幸いなことに、卵の内には一つも、割れたり潰れたりしたものはありませんでした。猫がそれを拾い集めていると、やがて親の水鳥が、卵と同じ位に真つ青な風切りを閃かせ、口には床材の綿毛をくわえて帰ってきました。彼女は猫がせっせせせ動くのを見るなり、何事があったと察したらしく、荷を置き風鈴のようなきれいな声を鳴らして跳ね回りました。

「まあ猫さん。どうなさいましたの」

すると猫は疲れた様子などちつとも見せずになっこり笑って言いました。

「なあに。いたちの奴が持つて行くこうとしてたんで、ちょっと懲らしてやったんです」

「まあ、いたちがー」

それを聞いた水鳥は目をつむって、あんまりの恐ろしさをいなしに、しばらくはもつぷるぷると震えていたのです。

けれども再び猫のことを見上げると、

「とにかく私、お礼しなくっちゃいけませんわ。お渡しできるものも、「この羽根へら」しかありませんけれど……」とガラス玉の眼をして言いました。それで肩もとにくちばしを入れて羽根を引き抜こうとしたのですが、猫がかわてて、それでも優しい声で止めました。

「痛いことはよしてくださいな。僕羽根ペンも布団も足りてますから、……それよか泳ぎがおできになるんだったら——」

「ごうしゃべって、猫ははつと口ごもりました。

——だったら、どうか僕に教授してください。

彼は無意識のうちにも、そう懇願しそつになつていたのでした。それはやっぱり歯がゆさや悔しさが、知らず知らず溢れそつになつていたのでしょう。少しぎゃんな水鳥のお嬢は、すらすらと泳げてしまつように生まれついているのです。またあのすれた所のあるいたちさえ、多少ぶかっこうでも速い河を渡れるのです。猫はそんな事を思つてしまうと、自分の無能が悲しくてしかたありませんでした。

それなのに、彼は結局、泳ぎを教えてくれとはとても言い出せないのでした。頼みさえすれば、水鳥は「まあ」などといって快く引き受けてくれることでしょう。猫にもそんなことは分りきつていたので。けれども、もし、もし晒われでもしたら、と考えると、もう気が気ではありませんでした。

「いいえ、魚を捕つていただけませんか」

「そんなことで宜しいの？」

水鳥はくつくつ笑つと、ふうわり飛びあがつて河の中の、ぼやけたとび石の上へ立ちました。そうしてじつと流れの一点を狙いますましておりますが、突然こまのように旋回して水中に突っ込んだかと思つと、そのくちば

しにはもう立派ないわなが一匹捕らえられているのです。それを眺める猫の心に、結局嫉妬などという余念はちつとも起きはせず、ただ憧れだけが立ち塞がっていたのです。

——僕は無能だ。

猫は自分の頬やひげやの辺りがすっと冷たくなるように思いました。それでも、そのような素振りを晒す事はとてもできませんから、「見事ですなえ」などとにっこりし、「……ああ僕そろそろお暇しなくっちゃ。お魚いただいて行きます。それじゃあどつも」

と、つむじを見せると、水鳥が「この度は本当に……」というのも上の空で聞き、やっぱり尻尾をぴんと立て、口には魚をくわえて、また河下の自分の棲家の方へ戻って行きました。陽は少しずつ河に落ちつつあり、水面はもうずいぶん目映く光っていたのです。

猫の住むほったて小屋の中でも、夜中の空気は冷ややかでありました。猫は地面と藁の布団との間に体を挟み込んで、小屋の天井を見つめておりました。彼は正味のところ何も持つてはいないのです。この潰れかけた家の他には、ほとんど身一つばかりなのです。

——僕は水鳥さんへちよっとした嘘を吐いた。どうしてかと言えば、羽根を抜かせるのが心苦しかったからだ。善意には違いない。しかしそこに、自分を良く見せようという気持ちは少しでもなかったか……。

水鳥はきつと何にも気付かなかったことでしょう。けれども、あの一言を呑み込んだ時から、猫は自分の魂胆をすっかり判り切っているのです。

——いたちの奴をああしていじめたのも馬鹿だった。あいつはもはや、初めから僕の泳げないのを知っていたの

じゃないか。そうなら、むやみに攻撃して、言い触らされるようなことがあったなら……。

そこまで来ると、猫は自分がさもなくして仕方なく、全ての考えを反古にしてしまおうと「正義のためじゃないか。現に水鳥さんはあんなに喜んでくれたじゃないか」とがなり立てました。するとなぜだか、涙がぼろぼろぼろこぼれて来、

「僕は森で一等でできる獣じゃないか。欠点を補う位の技量もあるじゃないか」

そうつぶやいてみても、結局納得してくれないのは猫自身の心だったのです。窓の外ではやはり河がゆるゆる流れ、加えて様々の星がいつぱいに蒼白く光っております。猫を少しでも慰めてくれるのは、彼の眼に淡くじんんで映る星々ばかりでありました。

「お星様、お星様、僕はどついたらいいでしょう。僕はどへへ行けばいいんでしょう」
そうやってしくしくと、柔らかな頬の毛並みを涙にぬらし、光らせていたのです。

この時偶然、猫の家の側を通りかかった者がありました。いたちです。それも猫の家と知って通ったではありません。空腹で眠れないので、何か食べ物を探して、あてもなくそこら歩きまわっていたのです。それというのも昼間あの青い卵を食べ損ねたからでしたが、いたちは猫のことを恨んではいませんでした。むしろ日頃から、少なからず猫を羨んでいるのです。

いたちとて、「改心」というものができぬのならば、そうしたかったです。誰に憎まれることもなく、安穩と暮らしてみたかったです。というのに彼は、狩りの他に生き方を知りませんから、「もう二度と悪さはしない」と誓った所で、そのまま飢え死にするか、約束を破ってより憎まれるか、二つに一つしかありません。その

よくな彼にしてみれば、猫はあんまり眩まぶしくて堪りませんでした。

——ああ腹が減った。俺は損な獣に生まれたものだ。……あの時、猫はどうして俺を見逃したことだろうか。俺のようなものは、河の中へ沈めでもしてしまえば良かったが。

そうとぼとぼ行くいたちの耳に、ふとすすり泣く声が聞こえました。いたちは初めひどくぎよっとしました。けれどすぐにその出所でどころを探し始めたのです。そうして、そのほったて小屋が見付かったのはすぐでした。

いたちはそろそろと走って行って、窓からこっそり内を覗のぞきこんでみました。

猫は壁際かべぎわに藁わらを敷いた中へ、滑らかな毛に脣くすをいっぱい付けて丸まっているのです。いたちは自分の夜目が利きくのが、切なくて仕方ありませんでした。でも猫がなにかぱくぱくしゃべっているのが分かるとまた走り出し、今度は薄うすい壁に耳をくっつけたのです。

「お星様、僕はどこへ行けば良いんですか？」

猫はしくしく泣きながら、震ふるえた、ねばついたような声でこう言いました。それを聴ききとった時のいたちはどんな気持ちであったでしょう。しばらくそこにたたずんでおりましたが、やがて珍しくしゃんと座るととうとう口を開いてしまいました。

「猫さん、どうなりましたんですか？」

壁の向こうから息を呑む音があっても、いたちは怯ひみませんでした。なるだけ違う声を作ったまま、また優しくそつと話しかけたのです。

「猫さん？」

「……ごなたでございましょうか？」

「お判りになりませんか」

「私たちは自分が星であるなどと、嘘の名乗りこそしませんでしたが、そのつもりではもういたのです。猫は正体を知っているのかいないのか、ぼんやりした調子でぼつぼつ話し始めました。

「お星様、僕は森の皆々にどのように見えているんでしょうか。みんなの中には、きれいな僕の偽ものがあるんでしょうか。僕その偽ものになれないんです。失望される位なら、いっそいなくなってしまうんです。もうどん詰まりにいるんです。僕は善人でも正義漢でもなくて、初めから、私利私欲の塊だったんです。……」

猫がおおよそこんな事を口走るのを、私たちは黙って聴いておりました。彼は猫にそんなことを言わせた自分をひどく憎みました。また「君はこうもきれいじゃないか」と言おうとしました。しかし同時に、心の底に何かどす黒いような感情をも覚えたのです。それは憐憫や優越や、ほんとうにそうだった類いのものに違いありませんでした。その鎖は、私たちを目がけて真っ直ぐ絡みついてくるのです。私たちは焦りました。

「そんな悲観したらいけません。……昼間の親鳥もだいがあなたに感謝していたでしょう。だから……」
その言葉は、猫が大きくしゃくり上げたので遮られ、何の意味もなく空中にこぼれました。そうして猫はいよいよ、

「僕は海底へ行きたい」とこうつぶやいたのです。

「誰も来られないような海の底へ、お星様。僕を送り届けてください」

「私たちはもう、何とも言えませんでした。どす黒い鎖はすっかり彼の体を捕らえ、ついに残酷な言葉を吐かせました。

「……夜中まだ星のあるつちに海へ行きなさい。そうしたら二度にまでも深く深く、泳いでゆけばいい」

「ええ」

それきり、猫はもう何も言いませんでした。私たちは「もう駄目だ」と思いました。

——俺が猫に会う事は、もう金輪際ないだろう。俺は嘘つきだ。しかし嘘だと白状しても、あいつはもう止められないだろう。あいつは高潔だ。もし俺が猫と生まれていたら、……。

けれども私たちはすぐにそんな考えを軽蔑し、ちらりと一度だけその家をかえりみるなり、再び闇の中へ歩み去って行ったのです。

猫はまんじりともせずに寢床に丸まって、しばらく窓の外を見ていました。彼は星がどうこうと真面目に信じられるほど、幼くはありませんでした。しかしあの言葉に反論できるほど強くもなかったのです。彼はおもむろに立ち上がると体をふるって藁屑を落とし、河に沿って海の方へ下って行きました。

外は全てが透き通った風に、妙に静かでした。波打ち際には貝ボタンのような月が落ちて、くらくらとさざめいておりました。

潮風はただでさえ、ひりひりと猫の鼻を打ちました。一步波間へ進むと、一瞬間置いて、疼痛と間違う程の冷たさが猫の脚を刺しました。ですが彼はもう歩を戻そうとは思われませんでした。そうして一步また一步と進んで行ったのです。

——ああ、とうとう後退りできない所まで来たぞ。

水は段々と軽くなっていきます。気付けば猫の顔はすっかり海に浸かっていました。それでもちっとも苦しくはありませんでした。それに夜の真つ暗な海の中でも、夜目の利く猫には何もかもがすっかり見えていたの

です。

猫は言われた通り、深く深く泳いで行きました。いつの間にかやら自分の前脚が二つの硬いひれになっていても、彼は恐ろしくありませんでした。また後脚と尻尾とが一つにくっ付いてしまっても、彼は「泳ぎやすくなつたぞ」としか感じなかったのです。

そうしてただただ潜り続けるうち、ふいと目の前を魚の群れが通り、その一匹が猫を見とがめました。

「きみ、どこへ行こうとしてるんだい」

「海のずっとずっと底のほうへ」

猫がこう答えると、他の魚達も後へ続いて□々に言いました。

「海の底へ行つてどうするんだい」

「そんな所、なにもないじゃないか」

「もつそろそろ夜があけるぞ。ぼくらと浅瀬の方へ行つて遊ぼうじゃないか」

猫は□をぱくぱくさせて、どうして自分が海の底へ行きたいのか説明しようと思いました。しかしそれが、脳髄に霧でもかかったように、ちっとも思ひ出されないのです。

海をこんな所までやって来た彼は、もはやとうに猫ではないのでした。縞のざらざらした硬い体とひれと尾っぽとを持った一尾の魚だけが、その場へただよっているのです。

「浅瀬はとりどりの水草やさんごや、それになかまも大勢いて、それはもうおもしろい所だぜ。ね、行こうよ」
彼はしばらく、名前の分からない感情にもじもじ悩んでおりました。ですがいずれどつでも良いように感じられて来、

「うん、浅瀬はゆかいだろうねえ」

そう言って尾っぽをくねらせるなり、彼らの後について、浅瀬の方へと泳いで行ってしまいました。以来、彼が想念に苦しめられることはもうありませんでした。

こうして、猫鮫という生きものは生まれたのです。夜明けの空に残った明星だけが、ちかちか光りながら、白んでいく海を見つめておりました。



選考委員コメント

『縞猫』

石野 晶

……文章力の高さは応募作中でも随一と言えるのではないでしょうか。縞猫の抱える葛藤や、イタチの心情もよく表現できていると思います。しかし、難解な漢字や表現が多用されていて、どのような読み手を想定しているのかという問題があります。童話であるからには、読み手にわかりやすく書くということも意識できたらと思います。

牛崎 敏哉

……作品応募がパソコン入力主流となつて、使い慣れない難解語句使用が増えたのは確かだが、本作品はまず手書きという驚きがあった。そこに文語的言い回しの文章が展開され、自筆原稿による異世界が構築されている。縞猫の「泳げない」をめぐる自己追及は、あたかも賢治の「よだかの星」を思わせながら、どこまでも海の奥底へ沈潜していく。よくぞ描き切ったものだ。

夏井 敬雄

……森の誰からも好かれている猫がもつ劣等感。いたちが生きるためにする悪さ。それぞれの心の葛藤が良く描かれています。自分の弱さを受け入れられず、自分より優れた者を賞賛できず、周囲の人たちの期待に応えられない自分を否定する猫の姿は、過剰な自我意識に苦しむ現代の私たちの姿によく似ています。

やえがしなおこ

……近代の童話を思い起こさせる独特の文体に、まず驚きました。見かけも精神も立派で、森の動物たちに一目置かれている猫と、「へそ曲がり」のいたち。それぞれの心の葛藤が、両者のやりとりを通して、丁寧に描かれています。猫の苦悩は、泳げないコンプレックスとして冒頭に語られていましたが、後半の「僕は善人でも正義漢でもなく」という言葉の方に、より真実味を感じました。「海底へ行きたい」というつぶやきが、悲しく心に残る秀作です。

銀

賞

『鯨のオーエン』

『鯨のオーエン』

福島県 尚志高等学校二年 七海千夏

董青石の青より青い、厚い雲のかかる海に、鯨の人魚が暮らしていました。

彼は名前を与えられるよりも幼いときに群れからはぐれ、暖かい海からこの冷たい海に流されました。猛り波や荒い潮に削られながら、なんとか青年の歳まで生き延びた彼。孤独の彼の心には、いつも氷柱が刺さったような穴が開いています。彼はその心の小さな穴を、見て見ぬふりをしてやり過していました。しかし彼は時々こんなことをひとりごちるようになりました。

「僕はなぜ、なんのために生きているのだろう。」

その疑問は彼を深淵に誘うと同時に、きらきら輝いていました。光のない深海で、彼を好奇と探求に駆り立てる小さくて確かな光。彼はいつも考えていました。胸に希望が満ちたり、絶望に押しつぶされたり、彼は、生きること必死だった幼少の頃にはあり得ないほど豊かに、目まぐるしく心を動かししました。「ぎつと何かを成すために一人でも生き残った、残されたのだ」。その小さな結論が彼をいつそう強く生かしました。

ある日のこと。彼はいつもより深く潜りました。自分を取り巻く暗闇も、子供のころは恐ろしくて仕方なかった重たい水の流れも、希望ある今の彼には怖くありません。

彼は目線の濃い藍の中に、白い光があるのを見つけました。それは近づくほど大きく、煌々と輝くのです。

彼は光の奥底に大きな影が揺らめいていることに気づき、目を見張りました。それは人魚ではなく、岩でもな

い、マストが折れて胴の割れた船の亡骸なきがらでした。彼は初めて見る沈没船に驚きながら、そしておっかなびっくり、それでも抑おさえきれぬ好奇心のままに近づきました。光源は、折れたマストの先に掛かったランプでした。暗がりで見える光の特別な神聖さに少しの間見惚みぼれ、そして胴の割れ目から沈没船の中へと進みました。彼は船もランプも知りませんでした。しかし恐れず、未知に魅み了りょうされるままに進みます。まるで導かれるように、彼の為に舗装ほそうされた道があるように。

ランプの光が僅わずかしか届かない船室の中は、荒れきっていました。豪華な家具の彫金ちゆうきんは錆びついて輝きを失い、壁の絵は傾あき退あせています。色彩のない世界で彼は、孤独な旅路の最中には見られなかった数々に圧倒されていました。そして彼は絵に惹ひかれ、しつかりと見てみたくなり、派手に額装がくそうされた大きな絵をランプの光の下に持ち出しました。そこに描かれていたのは、奇怪きかいな生き物です。自分によく似た上半身を持ちながら、身体からだの下半分は魚の形をしています。腕より太くて長い肢あしの先に、歪いびつな手のような部位が続いている、奇妙な生き物でした。彼はまじまじと見つめます。

「これは、なんだろう。海の中では見たことがない」

誰にともなくささやくと、

「それは、にんげんという」

暗闇の向こうから、そう答える声が聞こえました。その声は低く、艶つやもなくおそろしく、そして鯨くじらの彼にとっては久しく聞いていなかった他者の声でした。彼は驚いて声の方を向きます。すると闇からランプの光芒こうぼうの中へ、絵画の中の生き物によく似たものが進み出しました。

「私の家に何の用だろうか」

照らし出されたのは肌と髪はたの白い瘦やせた男おとこでした。じとりと鯨の彼を睨にらんで、不機嫌ふきげんそうにしています。鯨は「氣きまずや」でうわづった声で答えました。

「僕は狩かりをしていたら、物珍ものめずしくも光が見えたので興味のまま立ち寄ってしまったのです。ご不快な思いをさせてしまい申し訳ない」

「別に家に勝手に上がり込んだことは怒おこっていない。問題はその絵を見て、何を思ったかだ。おまえは、その絵に何を思った？ 何を見た？」

男は厳おとこかに問います。鯨は、すこし考えてからこう言いました。

「不思議な気持ちです。僕の知らないことばかりで」

「浮うかんだ疑問を言ってみなさい」男は答えます。

「あなたは、この絵に描かれている『にんげん』なのですか？ この、奇妙な形の、鱗うろこのない二股ふたまたの尾おひれは何ですか？ そして彼らはどこに生きているのでしょうか、水の中ではない場所にいるように思えます」

すると男は愉快というふうに笑ってから言いました。

「驚いた。おまえは人間を知らぬままその年まで生きたというのか」

「ずっと小さいころに群れと離れてしまい、勉強をしたことがないので」

「なるほど。わかった、その疑問すべてに答えよう、絵があった部屋で話そう」

上機嫌じょうきげんな男は鯨の彼を先ほどのうす暗い部屋に招まねぎます。そして腐くさりかけた鉄骨に腰かけて言いました。

「自己紹介をしよう。私の名前はアルブレヒト、絵の中の生き物と同じ『にんげん』で、二千年前に『にんげん』の世界に見切りをつけて深海にやってきた魔法使いだ。醜みにくくも永遠を求める強欲ごうよくな男だと思え」

「にんげんというのは二千年も生きるものなのですか？」

鯨は驚いて言いました。

「いや、私が特別な魔法で生き延びているだけだ。ふつうは皆百年経たずに死ぬ」

男は「残酷だろう」と自嘲のように笑い、ゆったりと話を続けます。

「二つ目の質問には答えた。次の話をしよう。おまえの言う、鱗の無い二つに裂けた尾ひれは『足』と名がついている。人間の世界はひれでは移動ができない。水の代わりに空気というもので満たされている。空という蓋と地面という底がある世界だ」

話を聞いて鯨は、きらきらと目を輝かせました。それを見た男は嬉しくなり、さらに多くを語りました。人間の世界には多くのクニというヒトのまとまりが存在したこと、肌の色も目の色もさまざまなこと、それによっていさかいが起こったこと、人間は鯨たち人魚のことを架空の生き物だと思っていること。そして男は語りました。「人間の世界には、人魚が人間になる物語がある。女の人魚が魔法で人間になって、恋をした男のもとに向かう物語だ。悲しい話だがね」

それを聞いた鯨は魂を震わせました。そして言いました。

「それ、僕もやってみたいと思います。陸の世界へ、行ってみたい」

「ほう。おまえも人間になってみたいと言っか」

「僕はずっと独りぼっちでした。でもにんげんの世界には、数えきれないほどの人がいる。つまり、独りぼっちじゃなくなる、とこのことですかね」

鯨は希望に満ちた早口で言いました。

「それに、この暗い海の底にはないものがたくさんある。僕、いつも考えていたんです。どうして自分は生きているのだろうか。その答えが、少し見えた気がします。知らない世界に行くために生まれて、そこで誰かとお会いするために生かされたんです。魔法使いさん、どうか僕をにんげんにしてくださいませんか。なんでもします」

あまりにも、輝く声でそう言いました。男は声のきらめきに圧倒され、驚いて、ゆっくりと問い直しました。

「軽々しく『なんでもする』なんて言うんじゃない。けれど、その思いが本気ならば、私も答えよう。具体的に言え。おまえは人間になって、何を望む？」

鯨は、真剣な眼差しで、逸る心を押さえつけて答えます。

「未知の世界で、一生愛する友達を、誰かを探したいです」

男は頼もしく微笑みました。そして、部屋の隅に転がっていた銀色の杖を拾い上げて言いました。

「良いだろう。おまえを人間にしてやる。でも無償じゃない、対価がいる、そして人間になるにも段階を踏まなくてはいけなく」

男は言い聞かせるように話を続けます。

「私の魔法でおまえを人間の形で生きながらえさせるにはせいぜい百年が限界だ。百年以内に誰かから愛を与えられればお前は本物の人間になる」

鯨は力強く頷きます。そして、ふたつ問いました。

「本物の人間になる前は何になるのですか？　そして、百年誰からも愛されることがなかったときは？」

「本物の人間になる前は、真珠の人形になる。人格と記憶は真珠の中に混ぜ込まれ、しゃべることもできず。そして百年誰からも愛されなかったら」

男は「息いきついて、悲しそうに言いました。

「真珠の体の真ん中、心臓のあたりに小瓶こびんが入っている。中身は強酸だ。これが破裂して、真珠の体を溶とかす。おまえは死ぬ」

「どうしてそんなこと……？」

「生まれ変わるための魔法に失敗したときの対価は、命だからだ」

鯨は息を呑のみました。あり得るかもしれない残酷ざんこくな未来に、背中が冷たくなりました。

けれども鯨は、弱気を押し殺して、ただ一言、

「それでも、陸の世界を見たい」

と答えました。男は「そこまで言われちゃあしょうがない」と杖をかざし、言いました。

「ならば魔法をかけよう」

鯨は魔法にかけられ、光に包まれました。段々と意識が薄れ、そして自分の身体が透すけていくのを感じます。最後に男は、光の中の鯨に聞きました。

「そつだ、おまえ、名前は？」

鯨は答えます。「僕には名前が無いのです」と。

すると男は笑って言いました。

「ならば名付けよう。おまえはオーエン。名前はオーエンだ」

オーエンが目を覚めたのは、柔らかな真白の砂浜でした。肺と鼻で息をするのだとアルブレヒトに教わった

ことを思い出し、赤子のように覚束ない、初めての呼吸をしました。それから上体を起こして座り、ぼろのローブをまとった、人間になった自分の身体を眺めます。真珠の純白に輝く滑らかな肌は、かつて尾ひれだった下肢にできた「足」まで覆っていました。桜貝の爪、肩まで伸びた黒い髪。形だけは、絵画で見た通りの人間になっていました。オーエンはゆっくりと、絵画の人間たちがそうしていたように立ち上がります。一歩一歩、歩くたびに沈み込む砂浜を歩いてゆきます。全身に感じる風に、潮とはまた変わった心地よさを覚えました。そして空を見上げます。深海の濃紺に似た色彩が頭上いっぱいに広がります。そこには海の表層に弾く泡によく似た、無数の小さな光が明滅を繰り返していました。

「そつだ、にんげんに会いに行かなきゃ。とにかく海から遠い所へ」

オーエンは眩きました。そして、重たい真珠の身体で海を背に歩き始めました。

深い、深い夜の中をさまようオーエン。真珠の肌は満月の光を受けて白く輝きました。歩く道は砂浜から木々の茂る山へ、緩い傾斜を登ってゆきます。やがてその傾斜が平らになったとき、視界が開けました。眼前に広がるのは、傾いた満月の光を受けて輝く真夏の野生でした。光合成を一休みして深く呼吸する花々、束ねた静謐に僅かなノイズを含んだ波の音、微熱の風。オーエンは圧倒されて立ち尽くしました。無言のうちに流れてゆく時間、静かに視界に色彩を映してゆきます。やがて空が橙に焼けて、琥珀の糸がたわみ、空が珊瑚礁の海より真っ青になって太陽が白く高くなるまで立ち尽くしていました。オーエンは真珠の胸が、興奮でドキドキするのを感じました。

「陸の世界は、こんな色に溢わっていて美しいんだ」

オーエンはそう言うと、また真つすぐに歩き出しました。人間のいるところを探して。

オーエンは山を越えて、流れ着いた浜の裏手にたどり着きました。まだ人間と出会っていません。陸にやってきて一日目は誰とも出会えませんでした。

二日目。オーエンはあることに気づきます。この島はひどく小さく、島を取り囲む砂浜を一周するのに半日とかならないのです。胸に一抹の不安を抱きました。

三日目、いよいよオーエンはこの島の真実を知ってしまいました。この島は無入島なのです。人間がいないのです。不安は大きくなる一方でした。

「だが、遠いどこかから船がやってきて僕を見つけてくれる」そう信じることで、自分を奮い立たせました。

四日目。オーエンは暇を持てあまして、山に入りました。これまで見ていない所を見てまわろうと。そしてオーエンは奇妙なものを見つけました。丸い金属の蓋が地面に張り付いているのです。それを無理やり退かしてみると、地下へ通ずる梯子が下りていました。なにかあるに違いないと中へ降りてゆきます。穴の中は無機質な白い光で満ちていました。

地面に足を付けたとき、初めてきちんと穴の中全体を見渡しました。そこはまるで、山一つくり抜いて作ったような秘密基地でした。きよろきよろと辺りを見渡しながら歩いていくと、オーエンの背丈よりも大きな機

械にぶつかりました。それは円錐の形をした金属の塊です。オーエンはそれを見上げました。そのとき、機械の影から誰か小さい子供が飛び出しました。

「きみ、誰？」

その誰かはそうオーエンに問いました。朝焼けの金に似た髪、オーエンより小さな体。それは人間によく似ていましたが、オーエンのような、硬そうな体をしていました。オーエンはそのだれかに問いました。

「きみ、にんげん？ 僕はオーエン。二元人魚で、いまは人形だ。僕は僕を愛してくれるにんげんをさがしている」
すると目の前の彼は答えました。

「人間は遠い昔に滅びたよ」

信じがたくも確かなその言葉は、秘密基地に静かに響きました。

「戦争で人が減り、隕石と温暖化で陸地が減った。陸地が減るから生き残りをかけてまた戦争が起きて、国が最後の一つになるまでそれを繰り返したんだ。この小さな島は、最後の国のなごり。この地球で最後の陸地」

オーエンは彼が何を言っているか理解できず、いえ、理解はしましたが信じられずに黙り込んで下を向きました。そこに追い打ちをかけるように、目の前の彼は続けます。

「そしてね、最後に残った国は宇宙にコロニーを作って、人間を選んで送ったんだ。そして選ばれなかった人たちはみんな海に逃げた。植物プランクトンと融合して、浅い海でなら生きていけるようになったんだ。つまりこの星に君が探している人間は、いない。ぼくは地球の滅びが記されたゴールデンコードと一緒にいつか宇宙に旅立つんだ……親切なだれかが手を貸してくれる日が来れば。ぼくは遠い宇宙を愛している、人型ロボット探査機ハラパン、形ある心を持たされた機械」

怒涛の情報量に、オーエンは目が回る思いをしました。しかし時間をかけて理解したこの星の惨状に、いつそう言葉を失いました。しかしハラパンの言葉を思い出すうち、無言の失意にひとすじの光が差ししました。ハラパンは宇宙を愛すると言いました。何かを愛する心があるということは、自分を愛してくれるかもしれない可能性が残っているからです。オーエンは勇気を出して聞きました。

「僕は誰かに愛されなきや百年後に死んじやうんだ。ハラパン、僕を愛してくれる？」
するとハラパンは少し考えてから答えました。

「愛とは技術ぞ。長らく人に会っていないばかりには、愛がわからない。だからしばらく一緒にいてみよう」

その言葉にオーエンは微笑みました。

そしてその後、二人は十年間を一緒に過ごしました。お互いのもつ全てを語り合い、夜になれば星を見るだけの十年間でした。それでもお互いが初めての友達になる二人には、その日々は夢のように輝いて記憶に刻まれ続けました。

「ぼくに記録された、人間の描いた模様は悲しみに閉じられたけど、その線と点は希望で出来ていた。終わりがあから美しい命たちの希望の叫びを、ぼくは託されている」

十年の会話の中で、ハラパンは何度もそう言って空を仰ぎました。宇宙に思いを馳せる彼の瞳は不思議な色に輝きました。それは、ハラパンの心の動きを映しているように思われました。

そして十年と一日目の朝、オーエンはハラパンに問いました。

「どうだい、僕のこゝろ、愛せそうかい？」

するとハラパンは申し訳なきように答えました。

「ごめんねオーエン。僕の心は、宇宙と人間以外を愛するようには作られていないみたいだ。きみは人魚だから、愛の対象にインプットされていないのや」

それを聞いたオーエンはひどくショックを受けました。目の前の彼は自分を愛さない。その事実は、オーエンの死を意味します。しかしオーエンはハラパンと過ごした十年間を思い出すと、初めてできた友達を尊く思うことで精一杯でした。そしてオーエンは言いました。

「なら僕は、君が宇宙と人間を愛する手伝いをしたい。僕が君を宇宙まで送るよ」

「きみ、ぼくのせいで死んじゃうんだろ？　ならぼくなんか酷いやつのためにそんなことしなくていいんだ、きみは」

「ごや、やらせてよ。何もしないで死ぬよりずっといい」

オーエンは失意を飲みこみ、信念と希望に満ちた目で言いました。ハラパンはその瞳を見て「ありがとう」と心から答えました。

その次の朝からオーエンは、先人たちが残した手引書の手はず通りに、円錐の機械を点検するところから全てを始めました。円錐の機械の名はロケットということ、打ち出すには燃料が必要なこと、精密にすべてを決めなければいけないこと。あらゆる問題を解決するために、オーエンとハラパンは八十年かかりました。作業で眠れない夜と、計算だらけの朝を超えてゆきました。オーエンの原動力は、ハラパンに幸せになってほしいという一心でした。

そしていよいよ、出発の朝を迎えました。歴史を刻んだゴールデンレコードを胸にしまったハラパンはロケット

トに乗り込みます。オーエンは秘密基地の小さな管制室からハラパンに最後のお別れを告げました。

「さよならの前に教えてほしい。君、今幸せかい？」

そう言ってレバーを倒すと、山が半分に分かれて秘密基地の床がせり上がり、ロケットがむき出しになりました。そして島にカウントダウンが響きます。ハラパンは言いました。

「ありがとう、オーエン。幸せだよ」

「それならいいんだ。ほっとした」

大きな地響きと共に、ロケットは旅立ちました。オーエンはその光景を、ロケットが星になって消えるまで笑顔で見送りました。

静かな夜のとばりが、二人きりだった世界を包んでいます。オーエンは力が抜けてふらふらと立ち上がり、そのままゆっくり浜辺へ歩きだしました。

オーエンは月光を受けて青白く輝く砂浜に横たわり、身体を丸めて泣きました。このあと自分がどうなるか、思い出したのです。真珠の頬を滑る水は、海と同じ味がします。もしも引き留めていたら、と何度も後悔しました。古くなってしまった記憶を追想しても救われないのは分かりきっています。それでも迫りくる死の前に、恐ろしくて泣きながら愛を祈りました。

しかし彼は祈る傍ら、自身のしたことを認めていたのです。誰も救われないよりは、地球最後の希望を空の彼方に送り出したことを「良かった」と思っていたのです。その感情は後悔とぶつかり、真珠の胸を内側から焦がしました。オーエンは残った長い時間を、秘密基地と浜辺の往復で過ごしました。それは初めて誰かに寄り

添^そった、尊い記憶のなつかしさをなぞることでした。残された十年の時間は心を削^{けず}りながら、しかしあつという間に過ぎてゆきました。オーエンはやがて死を、終わりを覚^{かく}悟^ごしました。かつての語^{かた}らいの中で、終わりがあから命は美しいのだと言ったハラパンを思い出しながら、最後の眠りにつきました。

百年と一日目、オーエンは白い砂浜で目を覚ましました。

ないはずの朝を、オーエンは迎えたのです。オーエンの真珠の肌は柔らかい人間の皮膚^{ひふ}に変わり、肉の体と、息をするたびに広がる胸を手に入れました。オーエンは驚き、喜び、涙を流しました。そして空を仰ぎ、言いました。

「もしかして、君、僕を愛してくれたのかい？」

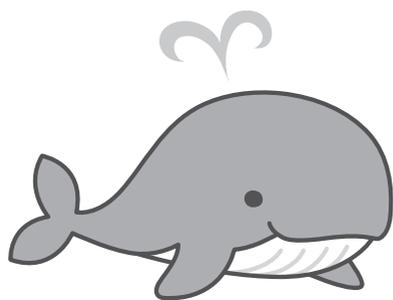
その言葉は青い波間に消えました。

一方そのころハラパンは、遠くなった地球を見つめて言いました。

「きみがぼくの幸せを願ってくれたこと、これってぼくへの愛だったのかしら。だとしたらきみを幸せにできなかったぼくの、この後悔も愛なのかな。ゆるしてくれ、ぼくはさつき、ぼくを幸せにしてくれたきみに幸福があるように祈ったばかりだ」

そしてまぶたを閉じて、つぶやきました。

「きみを幸せにしたいと、今から地球^{ちと}に戻^{もど}って言いに行ったり、きみは怒^{おど}るかしら」



選考委員コメント

『鯨のオーエン』

石野

晶

人魚姫を元にしながら、SF要素もある幻想的な話です。海の中や島の風景を美しく描写する表現力や、心の中をていねいに描き出す文章が素晴らしいです。愛を求めるオーエンが会うのが、人間以外を愛せない機械のハラパン。二人の交流の過程や会話の掛け合いにもっと枚数を割いていたら、ラストの感動に深みが増したのではないのでしょうか。

牛崎

敏哉

書き出しが「華青石（きんせいせき）の青より青い……」、この色のイメージがこの作品全体を暗示しているようだ。まず人魚は女性という思い込みが、すぐさま崩される。しかも鯨の人魚だという。人間になりたえという童話メルヘンかと思いきや、人類滅亡後の人型ロボット探査機ハラパンと出会うという展開。この壮大な内容に規定枚数は残念ながら短かすぎた。

夏井

敬雄

「生きる」ことの意味を問う作者の思索が伝わってくる作品です。孤独なオーエンは深海で暮らす鯨の人魚。魔法の力で真珠の人形になり、本物の人間になるうとしますが、出会ったハラパンは愛を知らない機械。人間になる望みを絶たれ、迫り来る死の前に、泣きながら「愛を祈る」オーエンの姿が印象的です。

やえがしなおこ

鯨の人魚の物語。風景描写は美しく、文章も巧みです。生きる意味と愛を求めて物語は展開し、最後まで読ませる力がありました。ただ、後半で愛という概念が、少し先走って説明的なのが残念です。主人公と人型ロボットが過ごした十年、二人は具体的に何を語り合ったのか、リアルな対話やエピソードが描かれていれば、より素晴らしい作品になったと思います。さらなる可能性を感じる作品です。

銀

賞

『土産』

『土産』
みやげ

石川県 金沢大学附属高等学校一年 青野有佳

「2013年に、32回目の夏季オリンピックの開催が決まった場所はどこだ?」「日本の東京です」「そつだ。2020年の32回目のオリンピックは東京で行われるはずだった。しかし、それは一年後の2021年に延期になった。理由は?」「新型ウイルスが世界的に流行し、人々が一か所に集まることは、感染のリスクを高めるため危険とされていたからです」「では、本当に2020年にオリンピックを開かなかつたのは、正しい判断だったのか?」「はい、正しいです。なぜなら……」『授業を終了』してくだやう』『よし、今日の新古代の授業はここまでだな、明日は新型ウイルスに対して、各国が行つた対策や、経済に与えた影響について学ぼう。給食はもうすぐ来るし、自分で配膳して食べてくれ。じゃあまた五限目の授業だな」

この教室には少女一人だけ。「五限目は古代数学か」はあとため息をつきながら、少女はまるでコンタクトを外すように眼球に触れると、レンズを取つた。

「まるで魔法よね」

少女がレンズを外したことで、少女の視界からは、教科書、資料集、教員が書いた文字、教員すらも消えた。レンズを外して見えるのは手垢一つない白色の壁、に映し出される使いこまれた教室の映像。それは違和感なく部屋全体に映し出され、教室にふさわしい部屋としてそこに存在している。蝉の声も、白く映える制服も、充滿する蒸し暑さもそこにはない。

『ランチが配達されました』

少女が勢いよく立ち上がったとしても、滑らかな床に椅子の音が響くこともない。地下室で続く階段を、少女は駆けつけてゆく。「あ、こんにちは」地下に来ては光は失われず、煌々と照らされる階段の中で清掃をする職員を見かけた。「こんにちは。ランチを取りに行くのかい?」「そうです」「えらいね」いつも変わらない抑揚と表情。

この職員は、毎日決まった時間に決まった場所を掃除する。階段を降りた真正面に、柔らかなクリーム色の自動ドアがあつて、ドアの前には一台の配達員が立っている。

「こんにちは。配達に参りました。お名前と生年月日を申し上げて」「ハル・アカサカ。3004年8月31日生まれ」「ご本人ですね。確認しました」傷一つない、滑らかな箱を手渡される。「落とさないようにしてください」「わかりました」配達員は、歩幅一つ乱れずにドアをくぐって去って行った。少女は踵を返し、階段を上り始める。一段ずつ上るたびに、息は切れ始めるが、暑さは感じない。「やっと着いたわ」少女は教室に戻ると、一つしかない椅子に腰かけ、一つしかない机に箱を置いた。

ふたを開けると、四角い正方形の中に、主食、副菜などがバランスよく仕切られて乗っているランチが入っている。ただし、見た目はどれも豆腐のように、四角く固められた白い固形物である。しかし少女は、嫌がるそぶりも見せず平然と取り出し、フォークを刺して食べ始めた。「今日はスパゲッティか。あ、サラダはトマトが入ってるのね」これが食事である。ひとたび口に入れてしまえば、味覚が触感や味から、料理として認識する。少女は食事を終えると、食器を箱にしまつて教室の外に置いた。教室の壁に寄りかかつて、腕時計の両側を軽く押す。様々なアイコンが表示された色鮮やかな画面が、ジジ、と浮かび上がる。少女は、画面に映る小説を読み始めた。少女が画面に触れずとも視線を感知して、ひとりでページはめくられていく。ただ目線だけを動かし

て、少女は黙々と本を読んだ。『五限目開始5分前となりました』少女は慌々、電源を切った。自分の席に戻り、机から「古代数学」と書かれた小さなケースを取り出す。ふたを開けるとそこには、先ほどと同じように小さなレンズが入っていて、少女が、まぶたを指で大きく開き、レンズを入れる。少女が三回ほど瞬きをする間に、視界に教科書、資料集、教員が現れた。

「授業の前に、話がある」教員は少女に目線を合わせる。「修学旅行の話なんだが、この授業が終わった後、画面に移動するから、レンズは外さないでくれ」「わかりました」「たしか一か月後だな。ルールを守って楽しんできてくれ。時間だ、始めるぞ」修学旅行。千年以上前にもあった、学生が学区から遠いところに行つてさまざまな事を学ぶ旅行。ただしそれも千年前の話だ。『時間です。授業を終了してください』「じゃあ今日はここまで」「今日もありがとうございます」「じゃあ画面に移行する。三回瞬きをしてくれ」少女が、ぱちぱちぱちと三回まぶたを動かすと、画面が切り替わった。

『こんにちは。お住いのエリアと生年月日、氏名を入力してください。入力した情報は情報管理局が保管します。入力した情報を保存します。保存が完了しました。行きたい時代はございますか』昔と今の修学旅行の最大の違いは、過去に行くこと。好きな時代に行くことができる。平安時代で貴族と共に和歌を詠んだ人。新中世で地球が人類を追い出すのを観察した人、Aーと呼ばれる機械と人間同士の第三次技術大戦を体験に行った人などがいる。『特に』『了解しました。それではランダムに選択します』少女が一度だけまぶたを上下に動かすと、画面が切り替わった。画面には四桁分のスロットが凄まじい速さで回転している。『お好きなタイミングで表示されているスロットに、四桁目から一つずつ触れてください』少女は躊躇せず、四桁目から表示されたスロットに人差し指で触れた。『2、0、2、0……2020年』

『貴女の行先は2020年です。2020年における注意事項を説明します。2020年には新型コロナウイルスが世界的に蔓延まえんしています。しかし貴女方、新人類はこのウイルスに対する免疫めんえきを獲得かくとくしており、行動の制限を受けることはありません。ただし旧人類には未来から来たことを、気付かれないように十分に注意をしてください。また、気付かれた場合には即座そくざに修学旅行を中止します。不慮ふりよの事故等で命が危険にさらされていると判断した場合も同様です。また、修学旅行期間中に関わった人々の貴女あなたに対する記憶きおくと、貴女がとった行動による結果は、8月31日午後11時59分59秒に消去されます。ここまでで何か質問があれば』

『「ないです」』了解しました。それでは一か月後、同様の時間にここから、2020年の旧日本国エリアに貴女を転送します。レンズを外してください。そういうと画面はプツンと切れた。後には、青白い空間が映し出され、そこから透すけて教室が見えている。レンズをケースにしまい、続いて後ろの席のロッカーから、白いケースを取り出した。蓋ふたを開くとそこには、「現代文」「新古典」「旧化学」などが書かれた同じようなケースがきれいに整列して、納まっている。そこに今日行った授業のレンズを入れて蓋を閉じた。『3020年7月1日、15時45分。データを保存、更新しんします』

『3020年8月1日となりました。日本エリア第三学区第一学年、ハル・アカサカをこれより、2020年の8月1日旧日本国エリアに転送します。本人確認を行います。完了しました。転送前に、ハル・アカサカの思考回路に、2020年の日本における使用言語、文化、慣習、マナー、政治形態、経済状況、一般的な共通認識、そして、我々人工知能に対する知識と認知を、組み込みます。同意であれば、ボタンを押してください』触れるか触れないかのうちに承諾しょうたくという文字が表示された。『それでは、今から転送を行います。よい旅を』

人が多いのは予想していた。一番驚いたのは、食べ物を見た目に個性があること。見た目も、肌触りも、舌触りもどれも豊富で、それでいて、ごちゃついている。豊富だが、整っていない。人も、食べ物も、本も、音楽も、文化も思考も豊富だけれど、整っていない。「ねえあれ食べに行かない？」放課後、駅まで友人と歩いていると、赤色で装飾された、一回り大きな車が何やら食べ物売っていた。「今日部活きつすぎてほんとにお腹減ってたんだよね。食べよっかなあ」赤い車の前には、ひざ下ほどの黒いボードがあって、色とりどりのイラストが描かれている。上の、はらいがくるっと巻かれたフォントのカタカナを読む。「クレープ……」「春も食べる？」

クレープ、なんだこれは。和菓子の類ではなさそうだ、洋菓子か。「ねえ、クレープって何？」聞いたことがない。おそらく2020年の日本でもあまりなじみがない食べ物だろう。私が無知なくとも、怪しまれはしな、「えっ、クレープ知らないの?」「そ、そんなに美味しいの?」「うん。食べたことないならさ、今食べてみようよー! どれにする?」

どれにする? と言われても、多すぎる。このクレープというのは洋菓子なのだろうが、野菜が入っているものもあるし、メニューを見るだけで目が回りそうだ。「迷うなあ」思考回路に日本語が組み込まれていなければ、完全に何が書いてあるかさっぱりわからない。「私のおすめは、チョコバナナに生クリームとチョコレートソースをまじりにしたやつ」「じゃ、じゃあそれで」「じゃあ私は、イチゴのこれで」「どうやら先に支払いを済ませるらしい。驚いたのは種類の豊富さだけではない。「え、今ここで作るの?」「そうだよ、ほんとにクレープ知らないんだね」せ、製造過程を見せる? よほど自信があるのだろうか。3020年は製造ラインは全て管理、制御され異物混入などはあり得ないし……そうか、逆に自信がなく指摘してほしいのだろう。

「ほ、あつ」

みるみるクレープが出来上がっていく。この店員は本当に人間か？ 2020年には既に、人型の接客機械ができていたんじゃないか。「クレープ食べるの初めてなんですか？」「は、はい」「じゃあ、トッピングは超マシンにしておきますね」「やったじゃん」

よくわからないが、どうやらサービスをしてくれるらしい。「どうぞ」「ありがとうございます」今にも溢れんばかりに、生クリームとチョコレートソースがたっぷりと乗せられ、バナナが詰められたクレープは、出来立て特有の温かさを伝えてくる。「いただきます」ああそつだ、日本人はたしか食事の前後で「いただきます」と「ごちそうさま」という言葉を使つんだ。

「いただきます」

今にもこぼれそうなトッピングを急いで口の中に入れる。自然と大きく口を開けて頬張ることになる。口いっぱい、生クリームとチョコレートソース、それからバナナの甘さが広がっているいろいろな味がごちゃ混ぜになった。「お、おいしー、ちやちやしてるけど、おいしー」「めっちゃ驚いてんね」夢中になって食べた。あつという間にクレープは、手の中から消えて、口の中に甘さだけが残る。もう一つぐらい欲しかったけれど財布がそれを許してくれなかった。歩道のそばの街路樹からセミの鳴き声が聞こえてくる。「ねえ、セミってなんで鳴いてるんだと思う？」「オスがメスを呼ぶために鳴いてるんですよ？」「本当にそうかな。ただ、私たちみたいに『あっちい〜』って叫んでるだけだったらっ？」「ええ、それじゃあメスを呼び込めないじゃん」「そんなことどうでもよくなって、ただ自分が思うことだけ叫んでるかもよ」

駅に着くと、先に電車に乗る友人が、右手に定期を持ちながらこちらを振り向いた。「ねえ明日さ、私の家に来て映画見ようよ」「いいよ。SFとか近未来系の話がいいかな」2020年の人間が、未来に何を考えている

のか。未来をどう見ているのか気になっていた。それに貴重な文化資料をこの目で見られる機会だ。逃すわけにはいかない。「あーでも、「コナだし、あんまり人を誘うのよくないかな」「うーんでもさ、あれって多くの人が長時間密になるのがだめなんですよ？ 何人ぐらい呼ぶの？」私はかからないし、問題はない。あるとすれば貴重な文化資料が見られなくなることに。」え、今のところ春ちゃんだけの予定」「じゃあ別に良くない？ お互いマヌクしてさ、映画見ようよ」

「おじゃまします」「はーい」時間はあつという間だった。初めて見る映画に、くぎ付けになっていた。ずっと二時間も画面を見るなんて耐えられるのか不安だったけれど、開始数秒でその不安は消え去った。背景、会話、食べ物、音楽、構成、目と耳から入ってくる情報は、二時間では足りないほど、豊富で鮮やかだった。立て続けに二本見た後、友人が立ち上がった。「そろそろ休憩しない？ お菓子と飲み物取ってくるから待ってて」友人は部屋を出ていった。初めて入った、2020年の人間の部屋を見回すと、こざれいにして整頓されているが、教科書などの勉強道具から始まり、漫画、雑誌、ポスター、ぬいぐるみ、鞆など様々なものが存在している。やはりごちゃごちゃしている。小さい頃、歴史資料館で見た物より、物であふれてるな。部屋の中をゆっくりと見渡していると、友人が戻ってきた。「ちよつとは片付けたんだけどやっぱり散らかってるよね。生活感があるってことで」

セイカツカン。

「どうした？ なんか気になるものでもあった？」「いや、なんでもない」

セイカツカン。それは聞きなれない言葉だったが、組み込まれた思考回路によって、その文字が露わになる。

生活感。

「じゃあ次回見る？」

次に見たのは人類が、新たな星を探すために宇宙に向かう物語だった。話は急展開で、どんどん進んでいくが、先ほどの「生活感」の三文字が頭から離れない。

「まだもう一本見られるけどどうする？」「最後はおすすめの映画みてみたいな」友人は、お気に入りという欄にある一番上の映画を押しした。それは、ファミリー映画だった。東京の下町で暮らす、家族の話だった。2020年よりももう少し古い年代の時代の話だ。それは「生活感」に溢れていた。2020年よりも人でも溢れ、産業がどんどん発達し、街が出来上がっていく。それは、少女の知る人類とは一番かけ離れていた姿だった。

そうか、生活感だ。3020年には、地球じゃないあの星には、生活感も欠片もない。無駄は削ぎ落とされ、かろうじて文化だけは人の営みとして認められているが、文芸も、絵画も、服飾も、料理ですらそれを生み出す人間の数そのものが減り、自然と衰退している。もし千年後、君が好きで映画も、よく休み時間に読んでいる本も、その部屋に置かれている漫画も、今手にしているお菓子も、全て消えてしまつて、極限まで無駄を省いた、真っ白な、いや白色すらない、すくすくまらな生活があるんだと言つたら、どう思つたらうか。

「えーなんか逆に見てみたい」

流れるエンドロールを横目に、万が一の話だけど、といずれ来る未来を飄々と話した。

「想像できないなあ。逆にそんな世界で何を思つのか気になるよね」「な、何も無いんだよ？」「だからだよ。何も無い世界をどう感じるんだろうと思つて。それに、ないなら創ればいい」創れば……。「私小説書いたことあってさ」「え、すごいじゃんー」「いやいや、一人で書いて一人で消化しただけだよ」「読みたい！」「2020年の、作家でない人間が書く文章。それはプロが書いたものよりも、生々しく、色濃く、生活感が滲み

出ているはずだ。「あんたならいつか。誰にも言わないでよ、恥ずかしいから」

「お、おもしろい……。まあってー！こ、これすごい面白いよー」「そう？」「うん、私が今まで読んできた小説の中でトップクラスだよ」「あんた今までどんな小説読んできたのよ」言葉に詰まってしまった。地球は文学も芸術も盛んだが、人類が別の星に移住する際、歴史的名著や貴重とされている資料以外はほとんどが、消えてしまった。今ではそれを嘆く人類もほとんど消えてしまっている。だから、こんなに親しみやすい文章は初めてだった。

「今日は31日、明日から二学期だ」今日は31日。修学旅行最終日となる。修学旅行にはお土産として何かひとつだけ、未来に持ち帰ることができる。いつもと変わらず、友人と二人で駅まで歩く。「あのさ、前に見せてくれた小説、「J」でいいから私にくれない？」何度でも繰り返し読んで読みたい。「あのあと誰にも話してなさそうだしいいけど……明日学校だけ大丈夫？」それはいいの。私明日、学校来れないから「本当はもう会うこともない。たわいもない話を繰り返しながら、一緒に電車に揺られて友人の家まで向かった。「はい、これ」「ありがとう」玄関前で紙を手渡される。「物好きだねえ」「本当に面白いんだよ」「じゃあまた、書いてみようかな」「え」「何？何か問題ある？」ただ、読んでみたかった。千年後も残るような名著をどうか、書いて欲しい。「なにも。楽しみにしてるよ」

「どうだった修学旅行は？」「楽しかったです」「そうか。よかったな」「はい」普段通り授業をして、普段通りランチを受け取りに行く。普段通りの挨拶を交わして、傷一つない、滑らかな箱を手渡される。中に入っているのは、ただ味と栄養が再現された、白い固形物。「落とさないようにお気を付けてください」「あ、あの「気付けば

□を開いていた。あの「ごちゃごちゃした、溢れんばかりの」「クレープを食べたいんですけど」「わかりました、明日クレープをお持ちします」「違うの。本当のクレープが食べてみたいんです」「……すみません。よく聞きたることができませんでした。もう一度話していただけますか」はなからわかっている。「いえ、あの」「それでも□の中に、じわりと甘さが蘇^{よみがえ}る。「なんでもないです」

帰ってから気付いたんだ。「もし、何かありましたら」「いえ、大丈夫です」もう、あの時の思考回路は組み込まれてない。君が書いた小説も、一行目から何が何だかさっぱりわからない。これじゃ読めないから、古典の勉強も「とちゃんとしよう」と思ったんだ。「配達ありがとうございます」でも、君の文章にだけ色がついて見える。君をここに連れてきたら、きつと君の周りが色であふれます。セミが鳴いている。

ああ、君をお土産にすればよかった。



選考委員コメント

『土産』

石野 晶

……無機質で清潔な未来の世界の様子がよく伝わってきます。未来に住む主人公の修学旅行の行き先が2020年。主人公の目に映る今の日本が、ごちゃついていて整っていないという感覚がおもしろいです。クレープを作るところを見て、食べるといっ連のシーンがリアリティがあり引きこまれました。最後の一文が、とても効いています。

牛崎 敏哉

……千年後の未来から2020年へ修学旅行でタイムスリップするという。作品全体の近未来的雰囲気戸惑っている。「新中世で地球が人類を追い出し、機械と人間との「第三次技術大戦」が勃発していたらいいと分かる。未来の徹底した「生活感」欠如の理由はそこにあるようだが、最も知りたいそこに至る経過が、読み手の想像に委ねられてしまっているのは残念。

夏井 敬雄

……A-依存を強める現代社会への批判が感じられる作品。未来から現代を訪れた少女。彼女には「生活感」とか「ないなら創ればいい」という友人の言葉が理解できません。しかし、千年後の時代に戻ると、友人の文章に色を感じ、もし、友人がいれば「周りが色であふれだす」と、豊富で鮮やかな過去の時代を懐旧します。失われゆく人間性を感じさせる『土産』という題名が秀逸です。

やえがしなおこ

……未来を舞台にした斬新な物語です。「生活感」という言葉が消え失せた無機質な世界から、2020年に「修学旅行」として転送される主人公が、雑多な世界に驚きながらもクレープを食べるシーンがおもしろく、未来から現代を照らす視点も新鮮でした。「色」を感じた「君の文章」とはどんなだったのか、さわりだけでも読んでみたいと思いました。

銀

賞

『窓ぎわの友達』

『窓ぎわの友達』

京都府 同志社女子高等学校三年

柿かき 沼ぬま 希のぞ 実み

心がぞわぞわする。こんなにも人の頭の中をのぞきたいと思ったことがあっただろうか。いや、ない！

ぼくは翔太しょうた。三ツ橋小学校の三年生。母ちゃんや父ちゃん、親友の豪ごうや広志ひろしをはじめとしたたくさんの人と楽しい毎日を過ごしている。

しかし、そんなぼくにはとても大きななやみがあるのだ。

「おはよー」

教室のドアを力任せに開け、バン！ と大きな音を立てたドアにクラスメイトは驚きの声を上げた後、「翔太、おはよう！」とぼくに笑顔を向ける。

晴れやかな気持ちで席についてランドセルをテキトーに床に放ると、となりでしんげんに本を読んでいるユウが目に入った。

「ユウー！ おはよー」

ぼくは元気よくあいさつをした。

「……」

しかし、ユウはこちらをチラッと見やっただけで、またすぐに本の世界へ帰ってしまった。

（今日もあいさつなしかあ……。）

さっきまでの晴れやかな気持ちがちまちしぼんでいく。

ユウはすごく静かな子だ。というかしゃべっているところを見たことがないのでぼくのあいさつに応えないのは当然のことだ。初めこそ気にならなかったが、彼と席がとなりになって一週間も経つとさすがに不思議に思うのだ。

うーん……やっぱり嫌われているのか……。でも何かしたわけでもないしなあ……。

こうして彼はぼくのなやみのたねとなったのである。

一時間目のチャイムが鳴る。ぼくのクラスは算数だ。おせじにもできがいいとは言えないぼくからすると、体育以外はまさに、すいみんの時間だ。

「今日はこの前のテストを返すぞー」

げっ、まずいぞ!? 思わず顔がひきつり、せなかに冷や汗がつたう。どうやらまずいのはぼくだけではないようで、豪も同じような顔をしていた。

すっかり忘れていたが、三日前にぼくらはテストを受けた。一応前日にべんきようはした。五分だけだけど。

しかし、豪は三分と言っていたから最下位ではない。……多分^{たぶん}。

そんなことを考えているうちに先生が僕を呼んだ。

「翔太——」

ああ、かみさま！ どうかぼくに三十点を！ あわよくば豪よりいい点をくださいー！

(二十八点……。)

おいしい。あと二点あればぼくの中では百点だったのに！ まあおいしいとは言っても、まちがいなく母ちゃんに

怒られる点数だ。さて、どうしようか……。

「おい、翔太！ なん点だった？」

必死に言いわけを考えていると、豪が血相を変えてこっちに來た。二十八点、と答えると彼はこの世の終わりのような顔になった。

「豪は何点なんだ？」

「十九……」

よし。最下位ではない！ やった！ これは言いわけに使えるぞ。

「二分の差がでたな。はっはっはっ」

ぼくが調子にのっていると、後ろにいた広志から「二十八点も十九点も同じだよ、二人ともちゃんと勉強しなよ」と冷静な一言が飛んできてげきちんした。

二人仲良く再テストが決まったところで、ようやく席に着く。なんとなくなりを見ると、ユウは百点のテストをランドセルにしまっていた。へえ、百点か、なるほど……。

「へっ!? 百点!?」

再テストのぼくは驚きのあまり思わず心の声もれてしまったらしい。しまった！ と思ったけどもうおそい。ギョツとしたような顔でこちらを見つめるおとなりさんになんと言いつけすればいいのか思いうかばなかった。あせったぼくの口から言葉が飛び出す。

「すごいなー 百点ってー 天才じゃんー」

ヤバイ！ まずは点数をぬすみ見てしまったことをあやまるべきだったのに！ 出だしから失敗してしまい、

本日二度目の冷たい汗が流れる。

たいへんなことになった。相手はおはようのあいさつさえ返してくれないなぞの天才だ。どんなことを言われるのだろう、はたまた無視されるだろうかとぼくは身構えた。しかし、ユウは耳をすまसानければ聞こえないような声でこう言った。

「えっと……ありがとう……」

案外ふつこの言葉が返ってきてぼくはびっくりした。それと同じくらい、ユウとの初めての会話がうれしくてぼくは続けた。

「やっぴりべんきよういっぴいしないと百点とれないよなっ」

「あ、えっと……人によると……思う。ぼくはじゅくに行くってるから……」

「じゅくか……。なるほどなあ……」

ほのぼのとした会話はしばらく続いたが、先生の声によって打ち切られた。しかし、ユウと初めて話せたことがうれしかったので、ぼくはめずらしくまじめに授業を受けたのだった。

「母ちゃん、ただいまー」

おかえりなさい、と母ちゃんがリビングから顔を出す。そのままリビングでおやつを食べようとしたが、続く母ちゃんの一言で計画が消えることになる。

「なにか母ちゃんにわたすものない？ お手紙とかテストとか」

しまった！ ユウとの初会話がうれしくて言いわけを考えるのをすっかり忘れてしまっていた。ぼくはとっさにごまかそうとしたが、母ちゃんには見ぬかれてしまったらしい。

「翔太、正直に出しなやろ」

どうやらぼくはおやつにありつけないようだった。

結果として、二十八点のテストは母ちゃんをとて怒らせた。いつも父ちゃんが助けてくれるのだが、それも今回は通じなかった。

ぼくはテストで六十点を取るまでゲーム禁止になってしまった。

おちこむぼくを見かねた父ちゃんは「男は禁止されるとやりたくなるよな！」となぐさめにならないなぐさめをくれたのだった。

翌日。ぼくは相当ひどい顔をしているらしい。豪と広志がそろってびっくりするほどには。

「ハア〜……」

だめだ。口を開くとため息しか出てこない。

「元気出せって。次のテストで六十点とれば遊びほつだいなんだろう？」

「そつだよ、少しの間まじめにべんきようしたらいいだけじゃないか」

「それがキツイんだって……」

べつにがまんするのはいい。でも好きじゃないことをがんばるのがいやなんだ！

完全にいじけているぼくを無視してチャイムが鳴って二人は席に戻っていった。となりからひかえめな視線を感じたが、今のぼくにはそれに反応できる余裕はなかった。

人は気がのらないと好きなことでさえやる気が起きない。きらいなことならなおさらだ。そう自分に言いわけをして一時間目、二時間目はねた。そして三時間目の算数。しかし、三時間目にもなるとあれだけいじけていた

気持ちも落ち着いてきた。

(いじけてもゲームはできないもんな……。)

よし。はじめに受けるぞ！ そう決意して先生から配られたプリントと向き合うが。

う~~~~ん！ さっぱりわかんない！

割り算ってなんだ。そもそもどうやって解けばいいのだろうか。

このまま考えていてもムダだ。あきらめて答えをつつしてあとで考えよう。そう思ったその時ユウから声がかけられた。

「あの……もしかして解き方が分からないの？」

「えっ、あ、うん。さっぱり分かんなくて困ってるんだ。次のテストがんばらないとだめなんだけど」

「たしか、六十点とるまでゲーム禁止……だったよね。えっと、それなら次のテストでとれると思……」

「えっマジで？」

思わず言葉をどめてしまった。ユウはびっくりして小さく「ヒッ……」とかたをゆらせた。でもぼくはかまわずつつけた。

「たのむー！ いつでもいいから次のテストまでぼくに算数おしえてー！」

昨日まで話しかけても何も返事がなかった相手に算数を教えてもらっていることを過去のぼくが知ったらどんな反応をするだろうか。

「えっと……まずどこが分からないの？」

「全部だー！」

「ぜっ……全部?」

「うん! さっぱり分かんねーや!」

むねをはって答えるといってきた広志に、

「自信満々に答える所じゃないでしょ」

と言われてぼくはすねた。ちなみに豪もなぜか一緒におしえてもらうことになった。

しばらくプリントに目を落とし、なにかを考えていたユウが顔をあげた。

「あの、少し聞きにくいんだけど……」

「おう! なんだよ、なんでも答えるぜ!」

申し訳なさそうユウとは反対にキラキラした笑顔の豪が言った。

「二人とも、九九は全部言える……?」

ぼくと豪は顔を見合わせた。どうやら思うことは同じらしい。

「九九ってなに?」

どうやらぼくらは本当にきそから分かっていなかったらしい。あの後からテストまで、ユウだけではなく、広志までぼくらに教え始めたから。

ユウの教え方はとても分かりやすく、ぼくも豪もなんとか六十点をこえることができた。ゲームきんしは取り消された。ユウにはかんしゃしてもしきれなかった。

テストが返された翌日、ぼくは改めてユウにお礼を言った。

「この前はほんついでに、ありがとなー。母ちゃん見せたらびびりすぎでカンニングまでつたがわれた」

「そっか！ それはよかったね！ でも次もちゃんとやらないとだめだよ」
「うっ……。分かってるって……」

ユウはこのベンキョウ会を通し、ぼくらに対してはよくしゃべるようになった。でも、友だち、というにはなにかちがう。うすいカーテンがぼくらを仕切っているような……そんな感じ。

まあそれはさておき。

「なあ、ユウ、なんかしてほしいこととかある？」

「えっ……。急にどうしたの？」

「ずっとおしえてくれてたから。なんかしたいなって思っつて。やりたいこととかない？」

ああ……。と小さくつぶやいてうつぶいた彼はこの前ぼくと豪に九九を全部言えるのかを聞いた時よりも言いづらそうにしていた。

お、これはなんかあるな!? そう思っつたぼくはもっぴと押ししてみた。

「言っつてみなきや分かんないだろ? 言っつてみー!」

「えっつと……実は、夜の光川丘ひかりがわがに星を見に行きたいんだ」

「おおー! あそこか! 行く?」

光川丘はこの地域のはずれにある小さな丘だ。丘のてっぺんからは町全体が見渡せる。でもてっぺんまでの道のが結構たいへんで、夜は子どもだけでの立ち入りはあぶないから禁止されている。

ユウは断られると思っつていたらしく「え、夜は立入禁止だよ?」と何度もたずねたが、禁止されたら行きたくはないのがオト」だ。

ぼくが意外と乗り気なのを見て安心したらしいユウは「今日が七月一日だから……行くなら七夕がいいかな。天の川が見えるかも」とトントン拍子に計画は決まった。

楽しみだな！ そう言って笑うとユウはうれしそうに大きくうなずいたのだった。

とうとう七夕になった。今日のぼくはずっとソワソワしていたようでいろんな人に「どうしたんだ？」と心配された。

問題はどつやって家を出るかだ。まず集合が午後七時の時点であやしまれる。まあこの計画を立てた時からおこられることは決まっているので、もうこわいものはないも同然だ。

だからぼくは正面とつぼを決めこんだ。

「母ちゃん！ 今から星を見に行つてくるー！」

「はア!? 星つて……ちよつと待ちなさいー！ アンタ今何時だと思つてるの?！」

台所からの母ちゃんの叫び声を背に、ぼくは街灯に照らされた通学路へ飛び出した。

「翔太くん！ こつちー！」

校門に着いた時、ユウはぼくをすでに着いていた。

「ごめんっ待たせた?！」

「ううん、大丈夫ー！ さっそく行くわー！」

どつやらユウはアンションが高いらしい。いつもより少し早い会話にぼくは心がほっこりした。

合流して十分、それはとつぜん訪れた。

「翔太くん、スマホからなにか通知の音がするよ?！」

「あれ、本当だ。なんたる」

「」でぼくは最大のミスに気が付いた。

「ユウー！ ヤバイかも!!」

「えっ!?! ぐっしっ!?!」

ぼくのスマホはでんげんがついている限り、母ちゃんと父ちゃんにぼくのいる場所が分かるようになっている。スマホの通知がどごとくということとは、今ぼくのスマホのでんげんがついている。ぼくらの場所は母ちゃんにばれているのだ。つまり。

「母ちゃんが……」に来る!!」

ヤバイ、これは本当にヤバイ。下手したら星を見ることなく家に連れもどされる。

「とっ、とりあえずでんげんを消そうー! それで丘まで走……」

ユウの声が不自然に止まった。ぼくの後ろを見て青ざめている。ぼくもとてもいやな気配を感じている。おそるおそるふり返ると。

「翔太——!!」

ものすごい顔で走ってくる母ちゃんがいた。

「うわああああああ!!」

ぼくが思わず叫んでしまっほどにその顔はこわかったのである。

「翔太くん!! とりあえずお母さんからにげなう!!」

「いや、にげるしかないわっしょい!!」

でんげんを切りながらにげ続ける。母ちゃんはぼくの名前を呼びながらせまってくる。ふりきるために丘のてっぺんについた時にはもうヘトヘトだった。

「っ、ついた……!」

ぼくらはたどり着くなり草原のうえにあおむけにたおれこんだ。つかれた。あまりにもつかれた。このままここで眠ってしまいそう。

そんなぼくとは反対に、ユウは目をキラキラさせて夜空を見上げていた。ぼくもユウにならって夜空に目をやるとその美しさに息をのんだ。

雲一つない夜空と無数の星。その中に静かに流れる天の川。ぼくが今までに見たどんな夜空よりもきれいだった。

「ねえ、翔太くん」

「んー? どうした?」

「今日学校で書いた七夕の短冊たんざくになんて書いた?」

たしか願い事って人に言つと叶かわなくなるのでは? と言つとユウは「ひみつにするから大丈夫!」と笑った。全く大丈夫ではないと思うけどぼくは「もつといっぱい遊びたいって書いた」と答えた。

すると、ユウは失礼なことに「ぶっ」と吹き出した。

「失礼だなー 別にいいだろ!?!」

「っぶぶ、ごめん翔太くんらしくっつ、っつ」

「そっついうユウはなんて書いたの」

ぼくがふてくされながら聞き返すと、ユウはこう答えた。

「もつとぶつうに人と話せますようにって書いた」

思わぬ答えにぼくはびっくりした。それと、ユウはぼくとぶつうに話している。なにがぶつうではないのだろう。そんなぼくの考えを見すかしたように彼はこう言った。

「ぼくは人見知りだと思われてるけど、それはちがうんだ。人と話す時、なにを言うのがせいかいなのか、まちがいのか。考えてるうちになにを話せばいいのか分かんなくなつて……結局、何も言えなくなるだけなんだ」
「だから、『ぶつうに話せますように』？」

ユウは静かにうなずいた。

正直な話、「なやんだところでかいけつしないこと」だと思った。にんげんなのだからせいはいもない。だからぼくは

「人がなに考えてるかなんて分かるわけじゃない」と言つてやった。

ユウはポカンとした顔をしている。とても面白い。

「だから、そんな細かい事をなんて考えずに話せばいいよ。まちがえたつてあやまればいいだろ」

なんだか、すごくかっこいいことを言った気がする。さすがぼく！と思つていると向こうから数人の足音と共におにのような顔をした母ちゃんがやってくるのが見えた。ぼくらは思わず顔をひきつらせた。

「翔太くん、あれヤバイよね……？」

「今まで一番ヤバイかも……」

予想通り、ぼくは母ちゃんから大目玉とゲンコツをくらった。その時のタンコブは一週間もぼくの頭にのこつ

だが、ユウとのスリル満点の星めぐりはとても楽しかった。

星めぐりの夜は金曜日だった。いつもなら土日はゲームについやしているが、当然、この土日は母ちゃんの説教でつぶれた。今回ばかりはどうしようもない。

そんな気まずい土日を終えて、月曜日。ぼくはいつものように大きな音を立てて教室のドアを開け放つ。

「おっはよー!!」

「翔太おはよー」クラスメイトが口々にへんじをする。いつも通りの良い朝だが。

「あれ、ユウはまだ来てないんだ」

いつもぼくより早く登校するはずなのにまだ来ていないようだ。少し意外に思っていると豪と広志がこちらへやってきた。

「翔太ー! お前、夜に光川丘行って怒られたんだって?」

一体どこから聞いたのだろうか、豪はおれも行きかかった! とすね始めた。これはなだめるのがめんどろだな、と思ったその時だった。

「おっ……おはよー!」

教室のドアからはつきりと大きな声でユウがあいさつをしたのは。

教室中がおどろきのあまり、静まり返る。ユウは今まで返事すらままならなかったのだ。

しかしそれも一瞬のことだった。すぐにみんな「おはよう!」と笑顔を返した。

いそいそとユウが席に着く。すかさずぼくは「おはよー!」とニヤツと笑いかけた。

すると窓ぎわの友達は今まで一番の笑顔を咲かせたのだった。



選考委員コメント

『窓ぎわの友達』

石野

晶

主人公の一人称で進む文章がテンポよく、小学生らしい日常の様子が伝わってきます。正反対の二人がだんだん仲良くなっていく様は微笑ましく、リアリティがあります。ユウの悩みに対する主人公の解答も、人柄がよく出ていると感じました。物語を通して、二人がそれぞれちょっとずつ成長できたことがよかったです。

牛崎

敏哉

主人公で小学三年生の翔太は、元気で明るく、どんなに怒られてもめげないキャラ。一方隣の席のユウは、成績優秀だが人とうまく話せない。二人がうちとけていく中で、やがて「夜の光川丘で星を見たい」というユウの願いをかなえるべく、大人の管理を突き破る翔太の冒険心がユウの気持ちを前向きに変えた。各々のやりとりが丁寧に描かれ好感がもてる。

夏井

敬雄

翔太君の悩みは隣の席に座るユウ君がいさつにも応えないことです。ユウ君のテスト百点に驚いた翔太君の言葉で、二人の初めての会話が始まり、ユウ君の望みの実現に奮闘する翔太君にユウ君は自分の悩みを打ち明けます。歯切れのよい会話とテンポのある行動描写がごどもの世界を上手に表現しています。

やえがしなおこ

読み終えて「素直な、いい作品だなー」と思いました。勉強はできないけれど、明るくて前向きな「ぼく」が、無口なクラスメート「ユウ」と心を通わせていく物語。一人称の文体も弾んでいて、母親とのユーモラスな攻防も楽しめます。七夕の短冊に「もっとぶつづに人と話せますように」と書いたユウの、ラストの変化がさわやかで自然でした。

受賞作品

銅賞 作品一覽

☆ 「さなぎびと」

富 樫 煌 北海道 北海道旭川東高等学校 2年

☆ 「時計台」

牧 野 優 芽 北海道 北海道札幌国際情報高等学校 2年

☆ 「名もなき羊飼いの話」

白 井 拓 斗 千葉県 県立柏高等学校 3年

☆ 「物売りは値段を付けない」

土 屋 喜 楽 神奈川県 県立金沢総合高等学校 3年

☆ 「空からのデリバリー屋さん」

落 合 紗也華 京都府 同志社女子高等学校 3年

☆ 「仮面屋」

松 末 まどか 愛媛県 県立松山西中等教育学校 1年

☆ 「トンボのおっさん一人旅」

岩 松 香 弥 福岡県 県立筑紫丘高等学校 1年

☆ 「空の海の散歩」

宮 田 千 晴 鹿児島県 れいめい高等学校 1年

【学校賞】

同志社女子高等学校（京都府）

【奨励賞】

北海道札幌国際情報高等学校（北海道）

ノミネート記念作品一覧

- ☆「刻は黄昏」
花牟禮 由 依 北海道 北海道札幌国際情報高等学校 2年
- ☆「セミのあのこ」
藤野 胡 花 岩手県 県立一関第二高等学校 2年
- ☆「桜の恋人」
岩倉 瑳 南 宮城県 聖ウルスラ学院英智高等学校 1年
- ☆「銀時計と一歩」
戸澤 和 貴 宮城県 県立宮城県仙台第二高等学校 1年
- ☆「雨降らしの木」
増 淵 馨 茨城県 県立下館第二高等学校 2年
- ☆「星の約束」
高橋 瞬 次 埼玉県 春日部共栄高等学校 3年
- ☆「飛行艇」
佐藤 綾 香 千葉県 植草学園大学附属高等学校 2年
- ☆「魔法のスケッチブック」
須之内 ゆり 千葉県 西武台千葉高等学校 2年
- ☆「時の旅狐」
林 倫太郎 東京都 都立北園高等学校 3年
- ☆「わたしの絵」
川崎 日 瑚 東京都 東京家政大学附属女子高等学校 2年
- ☆「幸せのりんごの木」
河村 春 果 東京都 三輪田学園高等学校 1年
- ☆「イエネズミのチカちゃん」
手塚 舞 子 神奈川県 日本女子大学附属高等学校 3年
- ☆「みるちゃんのめがね」
加納 真 奈 愛知県 県立時習館高等学校 1年
- ☆「普通の僕と普通じゃない千佳君」
河原 桐 子 愛知県 県立時習館高等学校 1年
- ☆「喪失屋」
菅谷 翔 大 愛知県 県立時習館高等学校 2年
- ☆「サラと、ナゾの、セカイ」
長井 華 蓮 三重県 高田高等学校 1年
- ☆「扉の先に」
小嶋 深 友 岐阜県 県立恵那農業高等学校 1年
- ☆「地藏の木」
松井 美 蘭 兵庫県 県立姫路工業高等学校 1年
- ☆「くものお菓子屋さん」
原 口 来 瞳 兵庫県 県立武庫荘総合高等学校 2年
- ☆「君に、届け。」
戸田 菜 月 広島県 県立福山誠之館高等学校 1年
- ☆「真朱の海」
八戸 日向葵 福岡県 県立筑紫丘高等学校 1年

第1回 受賞作品

- ☆金の星賞 「干潟^{ひがた}の夜に」
方 丈 真菜美 千葉県 県立千葉高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「ミドリノコエ」
池 宮 奈々子 沖縄県 県立那覇西高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「ちびときつねとおばあちゃんと」
昆 ちひろ 岩手県 県立不来方高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「水音^{すいお}の虹」
山 崎 美 穂 東京都 豊岡女子学園高等学校 1年
- ☆銅 賞 「お日さまと白い花」
阿 部 暁 子 岩手県 県立花巻北高等学校 1年
- ☆銅 賞 「お茶とオニギリ」
佐 藤 香 織 群馬県 県立高崎商業高等学校 2年
- ☆銅 賞 「音の子ララ」
波 場 友美子 神奈川県 鎌倉女学院高等学校 1年
- ☆銅 賞 「その心、忘れないでください。」
生 瀬 千紗子 神奈川県 鎌倉女学院高等学校 1年
- ☆銅 賞 「夜」
伊 藤 香 奈 岐阜県 県立各務原西高等学校 3年
- ☆銅 賞 「お星様をさがしに」
加 藤 直 樹 愛知県 南山高等学校 3年
- ☆銅 賞 「伝 統」
五百森 裕 子 香川県 県立飯山高等学校 3年
- ☆銅 賞 「お空にのぼったクモ」
坂 中 彩 長崎県 向陽高等学校 3年

第2回 受賞作品

- ☆金の星賞 「夢の羽～僕たちの約束～」
藤 原 歆 子 岡山県 県立津山高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「夏色の奇跡」
岡 部 綾 子 東京都 都立戸山高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「真夜中の冒険」
平 沢 美 佳 茨城県 県立水戸第三高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「ノラ爺のきらきらぼし」
橘 加奈子 岩手県 県立盛岡第二高等学校 3年
- ☆銅 賞 「からっぽの郵便箱」
吉 田 千 明 北海道 旭川藤女子高等学校 3年
- ☆銅 賞 「ねずみの勇氣」
小 野 雅 子 山形県 県立新庄南高等学校 3年
- ☆銅 賞 「月の下の晚餐会」
菊 池 優 香 千葉県 県立松戸高等学校 3年
- ☆銅 賞 「座敷わらし」
志 村 美 保 東京都 京華商業高等学校 3年
- ☆銅 賞 「陽のあたる丘」
金 行 めぐみ 東京都 白百合学園高等学校 2年
- ☆銅 賞 「コスモスのうた」
森 田 佳代子 富山県 県立井波高等学校 3年
- ☆銅 賞 「ナツの思い出」
伊 賀 みなみ 兵庫県 小林聖心女子高等学校 2年
- ☆銅 賞 「旅人」
池 村 怜 也 沖縄県 県立宮古農林高等学校 3年

第3回 受賞作品

- ☆金の星賞 「Comfortable Doll」
山本晴佳 栃木県 作新学院高等学校 1年
- ☆銀の星賞 「ないしょないしょの星祭り」
島貫春菜 山形県 県立山形西高等学校 1年
- ☆銀の星賞 「ジイチャンは僕のヒーローで」
小林奈々絵 北海道 根室高等学校 1年
- ☆銀の星賞 「月の夜」
菅野澄子 東京都 恵泉女子学園高等学校 3年
- ☆銅賞 「おみつ」
富樫雅章 山形県 県立置賜農業高等学校 3年
- ☆銅賞 「おばけ屋敷で見たものは」
木本奈緒 茨城県 県立土浦第二高等学校 1年
- ☆銅賞 「風の唄」
小川萌 東京都 お茶の水女子大学附属高等学校 1年
- ☆銅賞 「夏の約束」
服部真季 東京都 お茶の水女子大学附属高等学校 2年
- ☆銅賞 「てのひらのそら」
神崎由依子 東京都 慶応義塾女子高等学校 2年
- ☆銅賞 「夜空に浮かぶデュランタ」
峠田彩香 愛知県 県立時習館高等学校 1年
- ☆銅賞 「たからもの」
小林千津 京都府 同志社女子高等学校 3年
- ☆銅賞 「存在のあり方」
高畑明弘 香川県 尽誠学園高等学校 2年

第4回 受賞作品

- ☆金の星賞 「カラーメーター」
岡安茉莉花 埼玉県 栄東高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「ネコシャンブーのぼうけん」
矢吹優衣 福島県 県立光南高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「life times」
山本晴佳 栃木県 作新学院高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「RESET」
土屋絵美 東京都 白百合学園高等学校 1年
- ☆銅賞 「空色スケッチ」
石川朋 岩手県 県立水沢高等学校 2年
- ☆銅賞 「サマー・セブン・デイズ」
岡野真理 茨城県 県立竜ヶ崎第一高等学校 2年
- ☆銅賞 「青いカバ」
菅和也 東京都 早稲田大学高等学院 3年
- ☆銅賞 「フィードルの旅」
谷田雄一 東京都 早稲田大学高等学院 3年
- ☆銅賞 「しわとりばあさん」
森脇梓 京都府 府立北桑田高等学校 1年
- ☆銅賞 「二人の世界～空に流れる歌～」
中山真依 兵庫県 神戸海星女子学院高等学校 2年
- ☆銅賞 「Wish」
瀬良垣香 沖縄県 県立具志川高等学校 2年

第5回 受賞作品

- ☆金の星賞 「かっぱのはなし」
矢 吹 優 衣 福島県 県立光南高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「お化け踏切と不思議な窓」
三 宮 海 里 北海道 立命館慶祥高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「惑星観覧車」
大 野 真 季 栃木県 県立氏家高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「家族になろう」
山 本 晴 佳 栃木県 作新学院高等学校 3年
- ☆銅 賞 「夏休み ヒカリのオト」
工 藤 千 明 岩手県 県立盛岡商業高等学校 2年
- ☆銅 賞 「歌、満ちる夜」
島 貴 春 菜 山形県 県立山形西高等学校 3年
- ☆銅 賞 「ビー玉にうつるココロ」
岡 野 真 理 茨城県 県立竜ヶ崎第一高等学校 3年
- ☆銅 賞 「透明人間」
畑 野 舞 子 東京都 お茶の水女子大学附属高等学校 2年
- ☆銅 賞 「ミリのそばにいるよ」
森 仁 美 徳島県 県立城南高等学校 3年
- ☆銅 賞 「双子の肖像」
筒 井 陽 香 山口県 梅光女学院高等学校 3年
- ☆銅 賞 「Hg～水銀の魅力～」
荒 瀬 菜穂子 福岡県 県立小倉商業高等学校 2年
- ☆銅 賞 「約束の旅」
松 本 貴 子 沖縄県 県立嘉手納高等学校 3年

第6回 受賞作品

- ☆銀の星賞 「かっぱのかあちゃん」
市 川 愛 東京都 白百合学園高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「思い出の思い出は風の庭」
黒 田 佳 奈 香川県 県立三木高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「憎しみのカラス」
横 田 仁 美 山口県 県立防府高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「夕焼けの精」
河 原 奈 里 熊本県 県立熊本高等学校 2年
- ☆銅 賞 「^{しんわ}森話」
阿 部 美智子 岩手県 県立盛岡第二高等学校 1年
- ☆銅 賞 「おじいさんの棺」
伊 藤 早 紀 埼玉県 県立大宮武蔵野高等学校 2年
- ☆銅 賞 「虹色の枠の窓」
柴 原 由 季 千葉県 県立柏南高等学校 1年
- ☆銅 賞 「僕が強くなる日は、」
井 上 澄 香 東京都 都立富士高等学校 1年
- ☆銅 賞 「黒板ピリー」
河 合 礼 子 神奈川県 市立横浜商業高等学校 2年
- ☆銅 賞 「風送る」
若 槻 理 恵 島根県 県立横田高等学校 3年
- ☆銅 賞 「悲しいアクマ」
古 賀 ちひろ 福岡県 中村学園女子高等学校 3年

第7回 受賞作品

- ☆金の星賞 「鏡に映る夢」
武田 啓太 山形県 県立新庄南高等学校2年
- ☆銀の星賞 「ミコの大切な大切なものは」
石澤 咲希 岩手県 県立福岡高等学校3年
- ☆銀の星賞 「僕と狐」
北山 萌夏 東京都 文化女子大学附属杉並高等学校1年
- ☆銀の星賞 「くすの木のうた」
柳原 茉美佳 大阪府 大阪教育大学附属高等学校2年
- ☆銅賞 「空の旋律」
中島 菜月 群馬県 東京農業大学第二高等学校2年
- ☆銅賞 「子守桜」
清水 真裕 埼玉県 県立伊奈学園総合高等学校3年
- ☆銅賞 「星の降る夜」
山口 祥子 石川県 県立大聖寺高等学校2年
- ☆銅賞 「文字の旅」
田村 菜 愛知県 滝高等学校2年
- ☆銅賞 「毎週月・金は星の日です」
高山 愛美 岐阜県 県立加茂高等学校3年
- ☆銅賞 「いらない記憶の回収屋」
小屋 果歩 兵庫県 小林聖心女子学院高等学校1年
- ☆銅賞 「Love in Snow」
根 亘 めぐみ 島根県 県立太田高等学校2年

第8回 受賞作品

- ☆金の星賞 「昨日オバケ」
石田 祐也 群馬県 県立桐生高等学校2年
- ☆銀の星賞 「あめふるとき」
葛生 明日香 千葉県 東京学館高等学校1年
- ☆銀の星賞 「当たり前のこと」
石川 茉耶 東京都 お茶の水女子大学附属高等学校1年
- ☆銀の星賞 「上弦の海」
上岡 沙都 神奈川県 日本女子大学附属高等学校3年
- ☆銅賞 「桜の舞う頃に。」
小林 明日香 埼玉県 秋草学園高等学校3年
- ☆銅賞 「空を見上げて」
川上 小百合 千葉県 千葉国際高等学校1年
- ☆銅賞 「いちにち いちにち…」
吉岡 佑里恵 東京都 お茶の水女子大学附属高等学校2年
- ☆銅賞 「名のない喫茶店」
吉井 加奈 神奈川県 カリタス女子高等学校1年
- ☆銅賞 「贈り物」
長谷川 礼奈 神奈川県 日本女子大学附属高等学校1年
- ☆銅賞 「天体観測～星になった少年～」
豊原 彩香 福岡県 県立筑紫丘高等学校2年
- ☆銅賞 「ノノ」
吉井 史歩 鹿児島県 県立鶴丸高等学校3年

第9回 受賞作品

- ☆金の星賞 「うそつきねこムクリ」
吉澤 仁衣那 群馬県 県立高崎東高等学校3年
- ☆銀の星賞 「うそつきと魂管理人」
藤本 美紗子 東京都 お茶の水女子大学附属高等学校2年
- ☆銀の星賞 「トンボ池」
田口 健司 東京都 創価高等学校3年
- ☆銀の星賞 「SHEEP SLEEP」
長谷川 礼奈 神奈川県 日本女子大学附属高等学校2年
- ☆銅賞 「きいろの国」
工藤 舞子 青森県 県立弘前中央高等学校3年
- ☆銅賞 「夏跡」
増田 恵美 埼玉県 県立浦和第一女子高等学校1年
- ☆銅賞 「赤鬼と正月」
北田 ゆず 東京都 白百合学園高等学校2年
- ☆銅賞 「コトバの国」
茂木 まどか 山梨県 北杜市立甲陵高等学校1年
- ☆銅賞 「博士の愛したロボット」
八箇 裕子 富山県 県立大門高等学校1年
- ☆銅賞 「怪獣事件簿がくれたもの」
遠山 奈津子 岐阜県 県立恵那農業高等学校3年
- ☆銅賞 「仔猫の唄」
水船 愛英理 京都府 京都女子高等学校2年

第10回 受賞作品

- ☆金の星賞 「机の中は空」
内田 彩香 埼玉県 本庄第一高等学校2年
- ☆銀の星賞 「霧川の童」
高田 有優美 山形県 県立山形西高等学校2年
- ☆銀の星賞 「シルベル」
古関 友梨香 神奈川県 日本女子大学附属高等学校3年
- ☆銀の星賞 「アルクの大冒険」
坪井 みづき 京都府 府立京都すばる高等学校3年
- ☆銅賞 「クウの手紙交換」
川上 雅子 宮城県 秀光中等教育学校1年
- ☆銅賞 「またたき」
水野 秀成子 東京都 桐朋女子高等学校1年
- ☆銅賞 「ぼくたちのなつやすみ」
品田 茉莉絵 神奈川県 日本女子大学附属高等学校3年
- ☆銅賞 「空色は恋」
西山 萌 神奈川県 日本女子大学附属高等学校3年
- ☆銅賞 「もう一人の俺」
溝口 達康 京都府 府立京都すばる高等学校3年
- ☆銅賞 「夢の中の大図書館」
金川 絵梨花 兵庫県 武庫川女子大学附属高等学校3年
- ☆銅賞 「ビー玉水溶液」
佐々木 和 福岡県 県立筑紫丘高等学校2年

第11回 受賞作品

- ☆金の星賞 「うちゅう人からのてがみ」
番 場 絵 里 茨城県 茨城高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「どうして」
川 上 雅 子 宮城県 秀光中等教育学校 2年
- ☆銀の星賞 「おばあちゃんのドライバー」
上 田 侑 乃 埼玉県 浦和第一女子高等学校 1年
- ☆銀の星賞 「陽炎少年」
水 田 佳 奈 京都府 同志社女子高等学校 3年
- ☆銅 賞 「涙の柱」
長谷川 愛 瑠 青森県 県立五所川原高等学校 1年
- ☆銅 賞 「恋色ラムネ」
中 野 沙 紀 岩手県 県立花北青雲高等学校 2年
- ☆銅 賞 「露玉花語」
高 田 有優美 山形県 県立山形西高等学校 3年
- ☆銅 賞 「見沼のやくそく」
松 藤 美瑳子 埼玉県 県立浦和第一女子高等学校 2年
- ☆銅 賞 「ひとりぼっちの王様」
石 坂 梓 東京都 東京女子学園高等学校 1年
- ☆銅 賞 「心の中の星空へ」
北 澤 友里恵 東京都 お茶の水女子大学附属高等学校 1年
- ☆銅 賞 「先生」
島 田 瑛 京都府 同志社女子高等学校 3年

第12回 受賞作品

- ☆金の星賞 「金色のカメ」
上 田 侑 乃 埼玉県 県立浦和第一女子高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「にこにこ」
長谷川 愛 瑠 青森県 県立五所川原高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「はじめの一步」
関 菜々美 東京都 白百合学園高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「かけこえは「泣き虫ヒーロー！」」
吉 岡 明日香 神奈川県 横浜共立学園高等学校 2年
- ☆銅 賞 「夏の終わり」
清水畑 央 岩手県 県立平舘高等学校 3年
- ☆銅 賞 「お姉ちゃんになった日」
小田島 夕 花 岩手県 県立花巻北高等学校 1年
- ☆銅 賞 「お兄ちゃんに会いに」
似 内 萌 花 岩手県 県立花巻北高等学校 1年
- ☆銅 賞 「サンノ森」
川 上 雅 子 宮城県 秀光中等教育学校 3年
- ☆銅 賞 「カップの川流れ」
村 上 佳代子 宮城県 常盤木学園高等学校 2年
- ☆銅 賞 「人形語り」
坂 井 遥 香 福岡県 県立筑紫丘高等学校 2年
- ☆銅 賞 「月の花通りのかばん屋さん」
濱 田 鈴 鹿児島県 県立大島高等学校 1年

第13回 受賞作品

- ☆金の星賞 「シンフォニー」
原 尾 勇 貴 神奈川県 公文国際学園高等部 1年
- ☆銀の星賞 「鬼の子トキ」
上 田 侑 乃 埼玉県 県立浦和第一女子高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「アイーシャと奇跡の種」
大 場 あすみ 千葉県 麗澤高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「春の野のアレックス」
千 石 芙紀子 神奈川県 横浜雙葉高等学校 2年
- ☆銅 賞 「星にねがいを」
小田島 夕 花 岩手県 県立花巻北高等学校 2年
- ☆銅 賞 「茜色の空」
小長井 素 賢 埼玉県 県立浦和第一女子高等学校 1年
- ☆銅 賞 「優しさのカタチ」
関 菜々美 東京都 白百合学園高等学校 3年
- ☆銅 賞 「寛太日記」
藪 田 薫 理 東京都 白百合学園高等学校 2年
- ☆銅 賞 「特急蜻蛉——機三郎の手記より」
三 橋 克 馬 神奈川県 県立津久井浜高等学校 3年
- ☆銅 賞 「そして僕等は動きだす」
蓼 沼 理 紗 神奈川県 日本女子大学附属高等学校 3年
- ☆銅 賞 「夏の桜」
田 畑 奈 緒 鹿児島県 鹿児島純心女子高等学校 1年

第14回 受賞作品

- ☆金の星賞 「うまれる」
小田島 夕 花 岩手県 県立花巻北高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「蝉と花火」
山 寺 杏 奈 千葉県 西武台千葉高等学校 1年
- ☆銀の星賞 「金色の思い出一座敷わらしに会った秋ー」
吉 武 英 莉 東京都 白百合学園高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「僕を変えた夏休み」
歌 津 ま い 京都府 府立北嵯峨高等学校 3年
- ☆銅 賞 「木の山田さん」
柴 田 宏 大 北海道 小樽潮陵高等学校 3年
- ☆銅 賞 「深森奇譚」
松 村 美 里 東京都 鷗友学園女子高等学校 1年
- ☆銅 賞 「逃げないで、心」
戸 塚 紀 名 東京都 白百合学園高等学校 1年
- ☆銅 賞 「五年D組 深海クラス」
原 尾 勇 貴 神奈川県 公文国際学園高等部 1年
- ☆銅 賞 「鈴の音と天狗の山」
千 石 芙紀子 神奈川県 横浜雙葉高等学校 3年
- ☆銅 賞 「夏の終わり」
瓜 田 実 可 静岡県 県立清水南高等学校 1年
- ☆銅 賞 「ねずみのお化粧屋」
堀 井 柚 月 愛知県 県立西尾高等学校 1年

第15回 受賞作品

- ☆金の星賞 「めづ様」
佐藤 礼 菜 岩手県 県立水沢高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「アイアン」
原 尾 勇 貴 神奈川県 公文国際学園高等部 3年
- ☆銀の星賞 「[いし]のライオン」
迫 田 知 樹 大阪府 府立岸和田高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「冬馬とカンタ」
田 中 春 日 兵庫県 県立洲本高等学校 3年
- ☆銅 賞 「恥ずかしがり屋の特効薬」
齋 藤 秀 仁 群馬県 県立高崎東高等学校 2年
- ☆銅 賞 「三人の子供」
徳 永 志 帆 東京都 大妻多摩高等学校 2年
- ☆銅 賞 「古本屋」
福 嶋 一 菜 神奈川県 県立鎌倉高等学校 1年
- ☆銅 賞 「お日様フルーツ」
岩 佐 菜 々 子 福井県 県立藤島高等学校 1年
- ☆銅 賞 「アルフレッドと鏡」
宮 澤 か れ ん 静岡県 県立御殿場南高等学校 2年
- ☆銅 賞 「信じる強さ」
森 内 千 裕 大阪府 府立農芸高等学校 1年
- ☆銅 賞 「キツネが鳴く時」
田 畑 奈 緒 鹿児島県 鹿児島純心女子高等学校 3年

第16回 受賞作品

- ☆金の星賞 「弱虫鬼ごっこ」
佐藤 綾 香 岩手県 県立水沢高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「影隠し」
佐藤 礼 菜 岩手県 県立水沢高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「ひとりで電車に乗った日」
内 田 夏 鈴 東京都 立教女学院高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「本の虫」
小 山 夏 子 神奈川県 カリタス女子中学高等学校 1年
- ☆銅 賞 「雪とうそつき」
小 河 碧 峰 群馬県 県立前橋女子高等学校 1年
- ☆銅 賞 「たまきのたましい」
菊 地 結 衣 埼玉県 県立浦和第一女子高等学校 1年
- ☆銅 賞 「かしの木の山」
木 村 か の ん 東京都 聖心女子学院高等科 3年
- ☆銅 賞 「形或るもの」
羽 鳥 友 稀 静岡県 県立沼津東高等学校 2年
- ☆銅 賞 「とべない僕ら」
朱 宮 奈 々 葉 愛知県 県立一宮南高等学校 1年
- ☆銅 賞 「水色の秘密基地」
中 村 燎 平 福岡県 県立筑紫丘高等学校 2年
- ☆銅 賞 「あぶらあげ」
泉 侑 紀 熊本県 有明高等学校 2年

第17回 受賞作品

- ☆金の星賞 「知恵の神さま」
高橋 璃 来 北海道 標茶高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「二人のおじいちゃん」
肥 沼 由里子 埼玉県 浦和第一女子高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「猿の子」
加 藤 言 美 東京都 香蘭女学校高等科 1年
- ☆銀の星賞 「あたりめと金平糖」
小 山 夏 子 神奈川県 カリタス女子高等学校 2年
- ☆銅 賞 「線香花火が消えるまで」
友 清 佳 南 東京都 瀧野川女子学園高等学校 2年
- ☆銅 賞 「僕はアイスクリーム王子」
姫 野 友梨香 山梨県 駿台甲府高等学校 2年
- ☆銅 賞 「追憶」
長 倉 佑 夏 静岡県 県立吉原高等学校 2年
- ☆銅 賞 「コノハの不思議な夏」
朱 宮 奈々葉 愛知県 県立一宮南高等学校 2年
- ☆銅 賞 「少女と虹の橋」
佃 遥 佳 京都府 府立北嵯峨高等学校 3年
- ☆銅 賞 「8月のトレジャーハンター」
上 杉 ほのか 福岡県 県立筑紫丘高等学校 1年
- ☆銅 賞 「子狐の筆」
東 福 洋 美 福岡県 中村学園女子高等学校 3年
- 【学校賞】 同志社女子高等学校（京都府）
【奨励賞】 藤ノ花女子高等学校（愛知県）、翔凜高等学校（千葉県）

第18回 受賞作品

- ☆金の星賞 「セミのめげがら」
山 木 晴 香 大阪府 大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎 1年
- ☆銀の星賞 「狐とおばあさん」
西 部 響 京都府 府立北嵯峨高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「竜の子」
藤 川 諒 子 徳島県 県立富岡東高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「月とトマト」
瀬 口 愛 奈 福岡県 県立修猷館高等学校 3年
- ☆銅の星賞 「くじら座の物語」
千 葉 滯 奈 岩手県 県立一関第一高等学校 3年
- ☆銅の星賞 「ゆうたの夏祭り」
尾 下 陽 菜 東京都 女子学院高等学校 2年
- ☆銅の星賞 「ミレニウムドラゴンベイビー」
小 山 夏 子 神奈川県 カリタス女子高等学校 3年
- ☆銅の星賞 「翡翠」
餘 吾 美夏生 神奈川県 県立茅ヶ崎北陵高等学校 2年
- ☆銅の星賞 「どんなに小さくても」
長 倉 佑 夏 静岡県 県立吉原高等学校 3年
- ☆銅の星賞 「月の手記」
山 本 彩 乃 広島県 広島市立舟入高等学校 1年
- ☆銅の星賞 「おじいちゃんとお魚様」
寺 地 菜々海 鹿児島県 県立川内高等学校 3年
- 【学校賞】 日本女子大学附属高等学校（神奈川県）
【奨励賞】 兵庫県立姫路工業高等学校（兵庫県）

第19回 受賞作品

☆金賞

「普通じゃない」

藤川 諒子 徳島県 県立富岡東高等学校3年

☆銀賞

「二〇〇円のおばけ」

廣見 結菜 広島県 福山暁女子高等学校2年

☆銀賞

「悲哀のひまわり」

岡本 沙慧可 山口県 梅光学院高等学校3年

☆銀賞

「自販機」

大城 涼佳 沖縄県 県立小禄高等学校2年

☆銅賞

「土澤駅」

梅村 琴音 岩手県 県立一関第一高等学校1年

☆銅賞

「国と大蛇とこどもたちの話」

中林 綾音 群馬県 東京農業大学第二高等学校1年

☆銅賞

「ゆうなぎのうた」

伊藤 珠花 埼玉県 県立上尾高等学校3年

☆銅賞

「ちいさな森の物語」

仙波 智晴 富山県 県立高岡高等学校2年

☆銅賞

「宝石のひとみ」

山本 晴香 大阪府 大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎2年

☆銅賞

「熊狐物語」

岩木 彼方 岡山県 県立岡山一宮高等学校3年

☆銅賞

「鈴ラムネ」

片山 恵 熊本県 県立玉名高等学校1年

【奨励賞】 神戸星城高等学校（兵庫県）

第19回 ノミネート記念作品

- ☆「アゲハチョウは蛹の中で夢を見る」
作 田 彩 奈 北海道 北見藤高等学校 3年
- ☆「おせっかいなトナカイ」
高 島 来 幸 北海道 札幌啓成高等学校 2年
- ☆「ねっこ」
新 野 晴 菜 秋田県 県立湯沢高等学校 2年
- ☆「リーバー」
梅 津 泉 茨城県 県立土浦第一高等学校 2年
- ☆「いつまでも変わらない」
安 發 由紀乃 栃木県 県立鹿沼南高等学校 1年
- ☆「今日も神社で」
齊 藤 美乃莉 東京都 大妻中野高等学校 1年
- ☆「夢のような世界」
吉 田 玲 南 神奈川 川崎市立幸高等学校 1年
- ☆「極彩色のあなたへ」
餘 吾 美夏生 神奈川 県立茅ヶ崎北陵高等学校 3年
- ☆「こうもりひめ」
井 上 千桜里 神奈川 フェリス女学院高等学校 1年
- ☆「心の瞳」
中 山 朋 美 愛知県 県立時習館高等学校 2年
- ☆「想木」
安 達 万 桜 愛知県 県立時習館高等学校 2年
- ☆「動物たちの集会」
木 村 夏 希 兵庫県 県立尼崎稲園高等学校 2年
- ☆「天国の図書館」
沼 田 悠 花 兵庫県 県立加古川東高等学校 1年
- ☆「夏、風鈴の中で、君探す。」
鏡 味 萌 兵庫県 神戸星城高等学校 1年
- ☆「八月三十一日」
山 口 結 子 兵庫県 県立洲本高等学校 3年
- ☆「きのこの森」
河 元 明 里 兵庫県 県立長田高等学校 2年
- ☆「無限の実」
関 根 彩 楓 兵庫県 県立長田高等学校 2年
- ☆「レインコートと水たまり」
山 田 彩花音 和歌山県 県立笠田高等学校 3年
- ☆「道しるべ」
水 津 愛 乃 山口県 慶進高等学校 2年
- ☆「夏休み」
桐 原 大 成 熊本県 県立熊本工業高等学校 2年
- ☆「ブシュケの輝き」
岡 田 優 宮崎県 県立富島高等学校 2年
- ☆「ラストポチ」
比江島 凜 宮崎県 県立宮崎東高等学校 3年

第20回記念事業

特別表彰

《選考委員》

- 牛崎 敏哉 様 第1回～20回
小野寺悦子 様 (詩人・童話作家) 第1回～16回
柏葉 幸子 様 (童話作家) 第1回～16回

《団 体》

- 岩手県立花巻農業高等学校鹿踊部 (表彰式での演舞)
岩手県立花巻北高等学校放送部 (表彰式での朗読)

富士大学特別講義

「宮沢賢治から考える」宮沢賢治研究者等による授業

全15回 2021年4月12日～7月19日
(下線3, 7, 9, 10, 15回は2021年12月までYouTubeで配信)

● 講義内容

1. イントロダクション [基調講演] 「宮沢賢治から考える」
宮沢賢治記念館学芸員 牛崎 敏哉 氏
2. [時代と地域社会] 「宮沢賢治を育んだ花巻」 富士大学副学長 中村 良則
3. [宮沢賢治の生涯] 「わたしの宮沢賢治 祖父・清六と賢治さん」
林風舎社長 宮沢 和樹 氏
4. [「農」農学校教師] 「農学校教師時代」 宮沢賢治記念会理事 阿部 彌之 氏
5. [宮沢賢治の理念・実践活動] 「宮沢賢治・半生の悲願と実践活動」
宮沢賢治記念会評議員 菊池 善男 氏
6. [作品①(詩、俳句、短歌など)] 「雨二モ負ケズ」
NHK盛岡放送局アナウンサー 佐藤 龍文 氏
7. [作品②(童話)] 「なめとこ山の熊」 「なめとこ山の熊の地を歩いて」
森林インストラクター 高橋 修 氏
8. [作品③(童話)] 「風の又三郎」 「風の又三郎の原風景」
早池峰賢治の会会長 浅沼利一郎 氏
9. [作品④(音楽)] 「宮沢賢治は音楽に何を求めたか」
宮沢賢治学会 泉沢 善雄 氏
10. [作品⑤(絵画・花壇設計など)] 「宮沢賢治と植物」
サイエンスコミュニケーター 城守 寛 氏
11. [花巻市の取り組み①] 「賢治とまちづくりの歩み」
賢治まちづくり委員会委員長 木村 清且 氏
12. [花巻市の取り組み②] 「観光資源」 花巻市役所 藤井 淳 氏
13. [花巻市の取り組み③] 「地域経済の活性化」 花巻市役所 藤井 保宏 氏
14. [花巻市の取り組み④] 「生涯学習」とまちづくり 花巻市役所 佐々木正晴 氏
15. 「イーハトーブ」とは? 宮沢賢治記念館学芸員 牛崎 敏哉 氏

選考委員

(五十音順)



石野いしの
晶あきひろ
(小説家)

岩手県出身。二〇〇七年に『パークチルドレン』で第八回小学館文庫小説賞を受賞し小説家デビュー。二〇一〇年には『月のさなぎ』で、第二十二回日本ファンタジーノベル大賞優秀賞を受賞。



牛崎うしき
敏哉としや
(宮沢賢治記念館学芸員)

岩手県花巻市出身。学芸員、日本こどもの本研究会会員。絵本評論賞(すばる書房)、国民文化祭児童演劇脚本賞、「縄文まほろばの詩」大賞等受賞。また「劇団らあす」にて演劇活動を展開。



やえがしなおこ (童話作家)

同人誌「びわの美ノート」(松谷みよ子責任編集) 童話教室に学ぶ。『雪の林』で第十五回椋鳩十児童文学賞、第二十三回新美南吉児童文学賞を受賞。物語、絵本、紙芝居作品など。岩手県在住。



夏井 敬雄 (富士大学教授)

岩手県久慈市出身。國學院大学文学部文学科卒業。岩手県立総合教育センター教科領域教育室長、岩手県高等学校文化連盟文芸専門部長、岩手県立岩泉高等学校長、岩手県立大船渡高等学校長を歴任。「日本語の世界」等の講義を担当。

第一回からの受賞作品（大賞・優秀賞）は、童話大賞公式ウェブサイトに掲載しています。

<http://www.fuji-u.ac.jp/koukousei-douwa>



全国高校生童話大賞受賞作品集

発行日／2021年12月11日

発行／**全国高校生童話大賞実行委員会**
富士大学
花巻市
花巻市教育委員会

事務局／〒025-8501 花巻市下根子450-3 富士大学内
全国高校生童話大賞実行委員会事務局

◆本作品集に掲載の文章・イラスト等の無断転載を禁じます。